

第3章 京都大学本部構内 AX25・AX26 区の発掘調査

古賀秀策

1 調査の概要

調査地区は京都大学本部構内のほぼ中央に位置し、吉田山西麓の北白川扇状地の扇央にあたる（図版 1-230・241）。

ここに文学部校舎の新営が予定されたため、これまでの周辺地区の調査成果を勘案して、新営予定地内の発掘調査を実施した。発掘調査は AX25 区（230地点）の1314m²を1995年3月7日から6月7日まで、AX26 区（241地点）の627m²を1996年1月22日から3月15日までにわたっておこなった。2つの調査区は東西に隣接しているため、前者を西調査区、後者を東調査区と呼び、この章であわせて報告する。

本部構内ではこれまでの調査で、弥生時代前期の流路（219地点）、奈良時代の竪穴住居（75地点）、中世の建物（214地点）・土壙墓（75地点）・土器溜（90・110地点）・砂取穴（214地点）・濠（214地点）・白川道（168地点）、近世の白川道（57・90・181地点）などが見つかっている。絵図などからは幕末期に尾張藩邸の存在したことが知られている。また、1993年度実施の本調査区の西に隣接する地区（218地点）の調査では、縄文時代後期の多量の遺物を発見したほか、中世の井戸・集石土坑・集石・溝などの遺構や近代の建物跡を検出している。したがって、今回の調査も縄文時代から近代にいたる遺跡の存在が予想されていた。

調査の結果、西調査区の北側と東調査区多くの部分を前身建物基礎によって大きく破壊されていたものの、古墳時代の土坑、中世の溝・土坑・土器溜や近世の野壺、近代の井戸・建物跡などの遺構を発見した。出土した遺物は縄文時代から近世にわたり、西調査区で整理箱40箱、東調査区で14箱をかぞえた。

2 層 位

現地表面の標高は58.3～59.6mをはかり、北東から南西へなだらかに傾斜する。基本的な堆積は、上から順に表土（第1層）、灰褐色土（第2層）、茶褐色土（第3層）、黄色砂（第5層）、暗褐色土（第6層）である。

灰褐色土は近世の遺物包含層で、後世の削平を免れた西調査区前身建物の中庭部分のみ薄く残っていた。茶褐色土は古墳時代から中世の遺物包含層で、上層から13世紀前半を

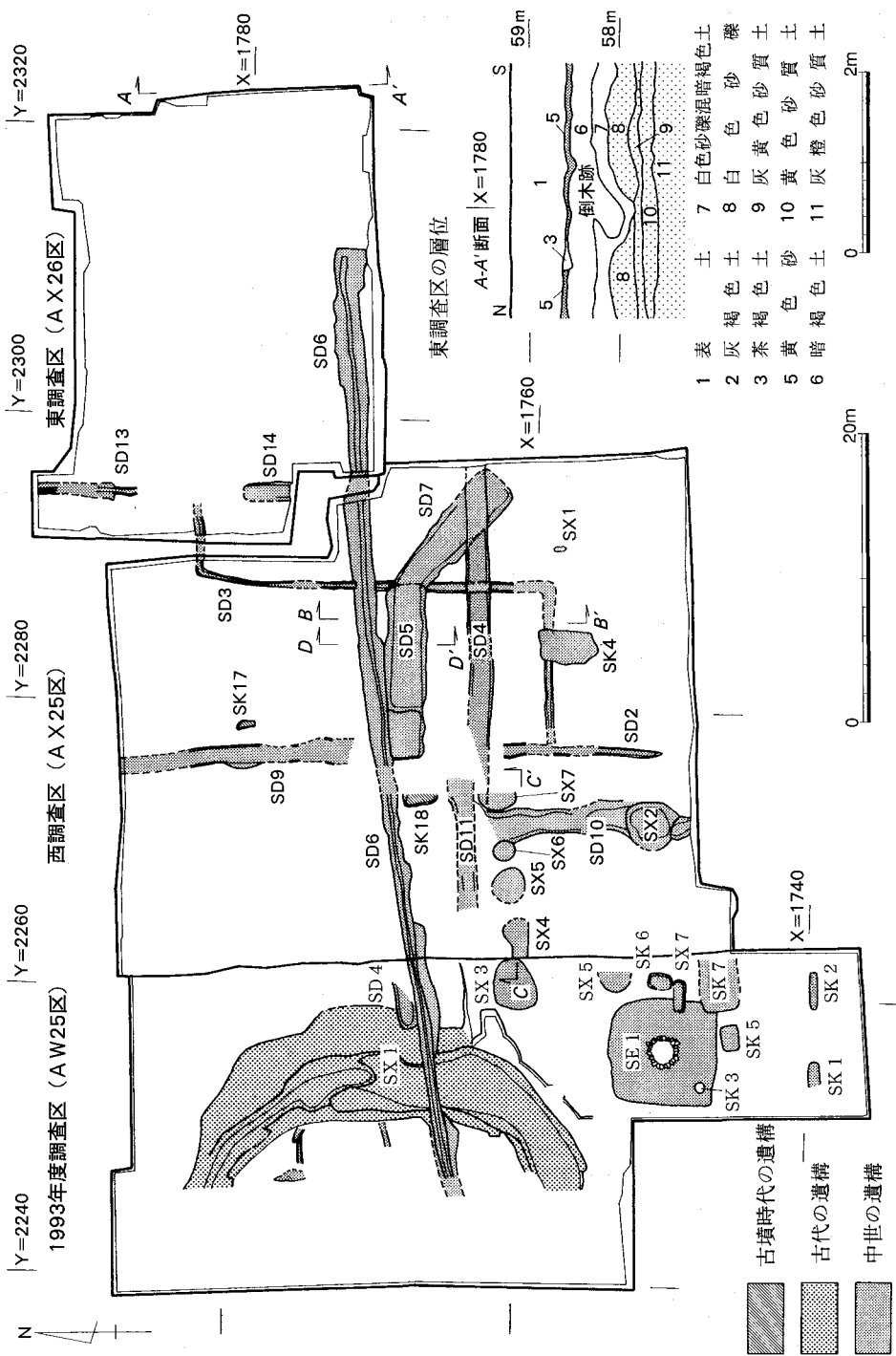


図26 古墳時代～中世の遺構 (縮尺1/500) と東調査区の層位 (縮尺1/80)

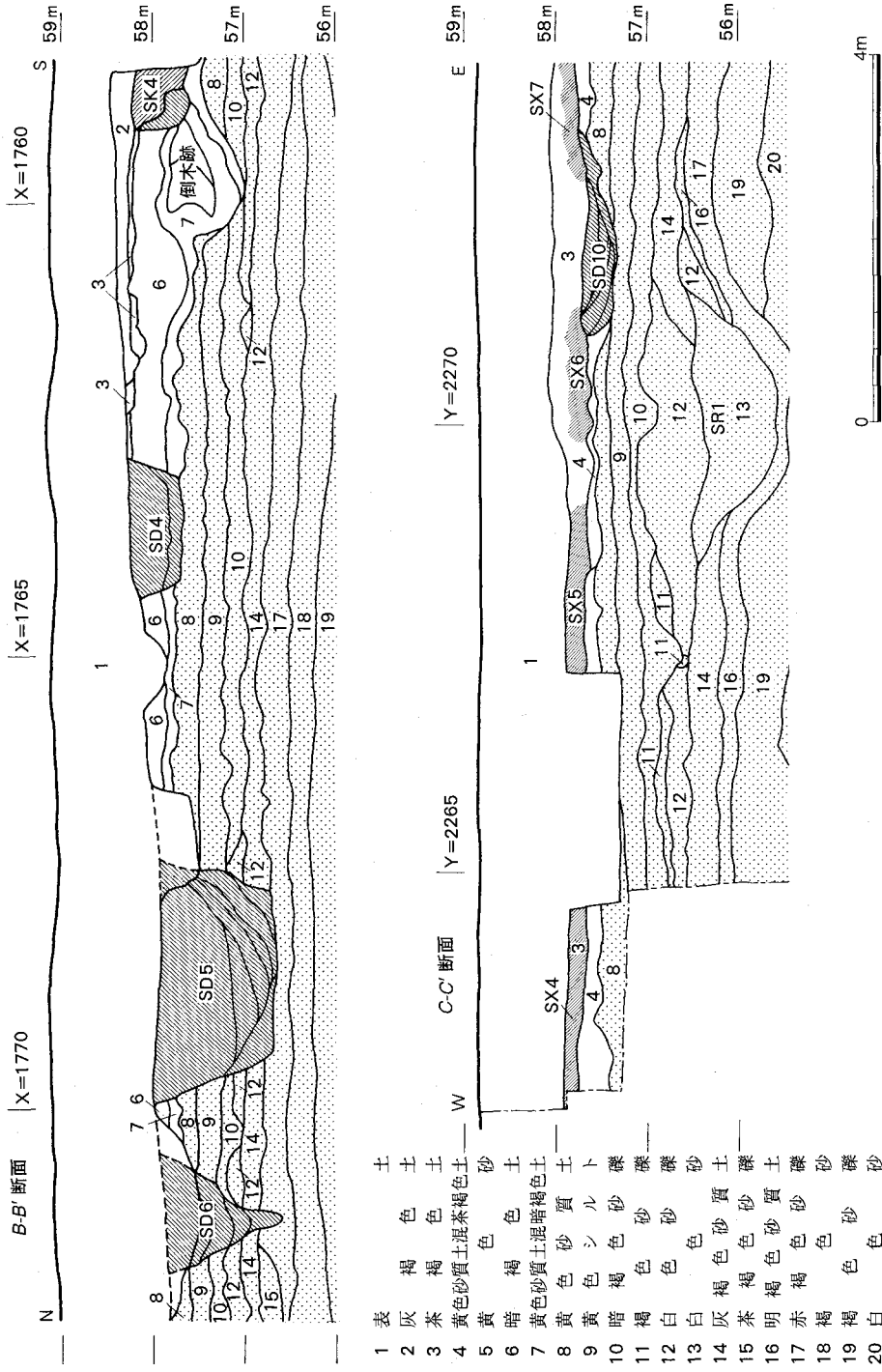


図27 西調査区の層位 縮尺1/80

中心とした遺物が出土し、下層からは7世紀後葉～9世紀の遺物が出土する。

黄色砂は弥生前期末から中期初頭の洪水層で、これまでの周辺地域の調査で京都大学吉田キャンパスの一帯に広く堆積していることが明らかになっている。本調査区での黄色砂の堆積は薄く6～10cmほどで、堆積の場所も西調査区の西側の一部と北辺、東調査区の東辺などの周辺部にかぎられており、調査区中央部には認められなかった。

暗褐色土は西に隣接する218地点で縄文後期を中心とする土器が多量に発見された層に連続する層であるが、本調査区での出土量はわずかであった。

第8層以下は無遺物層で、砂層と砂礫層との互層をなす。

3 先史時代の遺跡

(1) 遺 構 (図版12-2, 図27)

先史時代の遺構には、自然流路SR1と倒木跡がある。

自然流路SR1は暗褐色土より下の層位確認のための深掘り断面で発見した。X=1760, Y=2270付近で、幅約3m深さは約1mをはかる。流れの方向は砂粒の向きから北から南とわかるが、時期は不明である。

倒木跡は、暗褐色土の下面で、東西調査区の全面で多数検出した。平面は径約1～2mの不整形円で、上下の土層が一部逆転していることが特徴である。

(2) 遺 物 (図版13, 図28・29)

暗褐色土層中からは縄文後期を中心とした70点の土器を取り上げた。また、上層の歴史時代の土層中にも縄文土器と石器1点が含まれていた。

隣接する調査区218地点では、縄文後期を中心とした土器が1200点近く出土した。出土地点は北西隅部に集中しており、ここから南あるいは東にうつるにしたがい密度は低くなる傾向を示すことから、縄文時代の遺跡はここから北側あるいは西側へ広がるとされている〔千葉ほか97〕。今回出土した縄文土器は、同じ後期を中心としたものにまとまるが、出土点数は少なく、出土の密度も西調査区から東調査区にかけて低くなり、遺跡の中心が北ないしは西にあるという推測を肯定する結果となった。

暗褐色土出土土器 (Ⅱ1～Ⅱ18) Ⅱ1とⅡ2は縄文中期の資料である。Ⅱ1は船元Ⅰ式深鉢の波状口縁の頂部。口縁は外面を肥厚させて環状の口唇を形づくり、外端に刻目をいれる。外面は隆帯上に押引爪形文を刻み、内面は口縁部の直下に刻目をもつ渦状隆帯を貼りつける。Ⅱ2は里木Ⅱ式深鉢の胴部。撚糸文の地文をもつ。

先史時代の遺跡

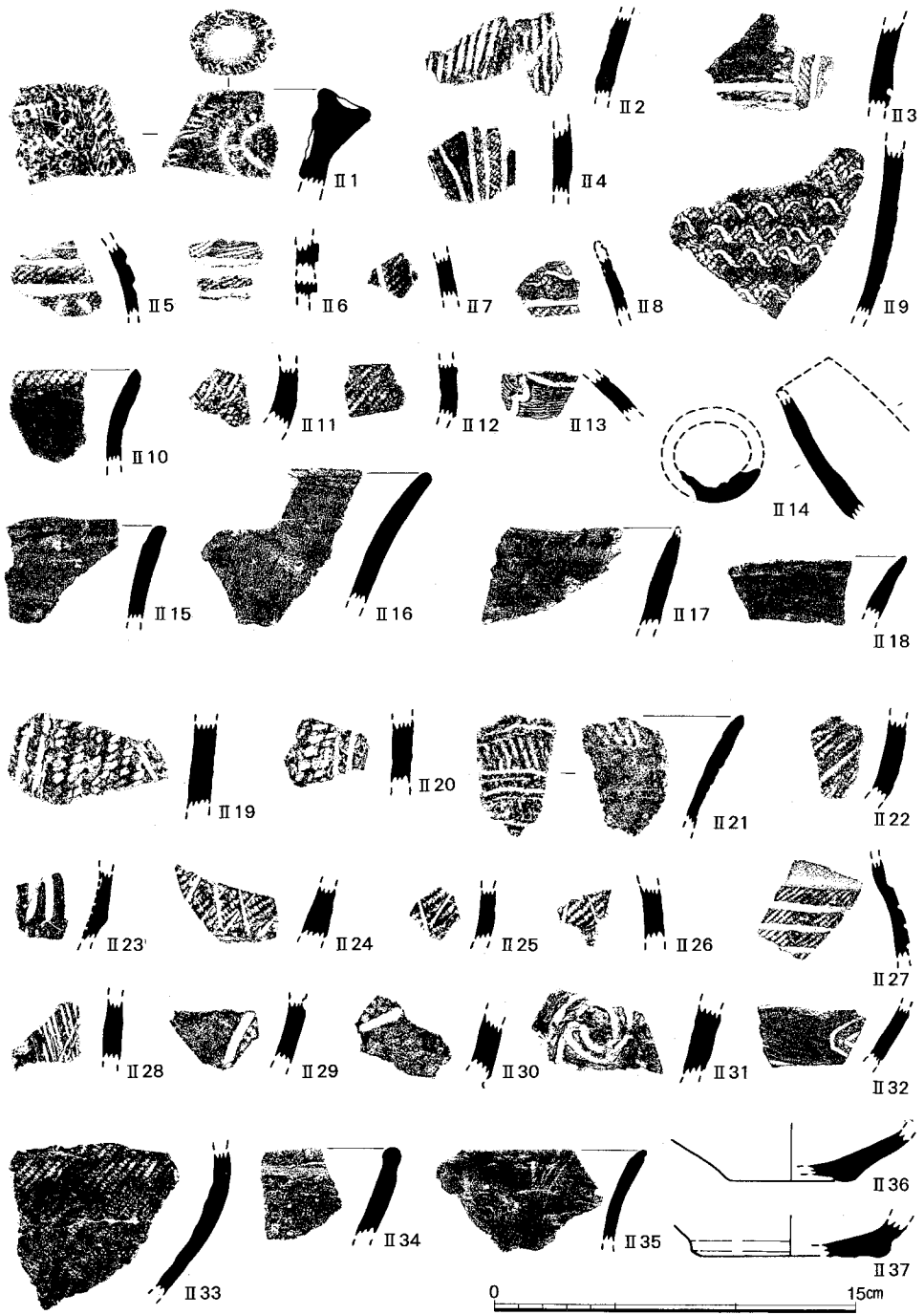


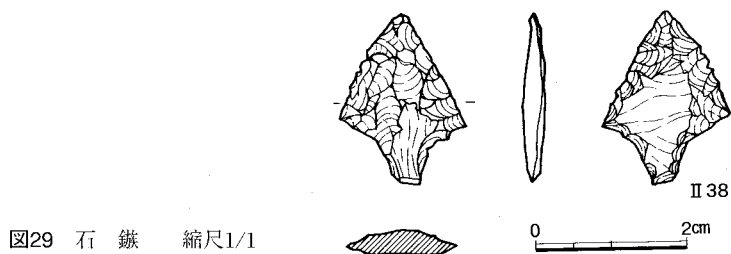
図28 暗褐色土出土土器(Ⅱ1～Ⅱ18縄文土器), 上層遺構出土土器(Ⅱ19～Ⅱ37縄文土器) 縮尺1/3

Ⅱ 3～Ⅱ 18は後期前葉～中葉の縄文土器である。Ⅱ 3は深鉢の胴部。内外面を丁寧に篋削りしたあとに、縦・横の沈線を加え、沈線間に縄文を充填する。沈線は縦が横に先行する。Ⅱ 4は深鉢の胴部。3条の沈線に2段左撚縄文を充填する。Ⅱ 5は深鉢の胴部の上部。横方向の2条の沈線のすぐ下に沈線と同じ原形で山形列点文を刻み、2段左撚縄文を加える。Ⅱ 6とⅡ 7は深鉢の胴部小片。いずれも沈線をほどこしたあと、2段左撚縄文を加える。Ⅱ 8とⅡ 9は同一個体で、結節縄文を地文とする深鉢である。Ⅱ 8は内湾する口縁部の直下の部分とおもわれ、横走る2条の沈線間に1帯の結節縄文をほどこす。Ⅱ 9は胴部下部分で、横方向に上から1帯、3帯、1帯の結節縄文をほどこす。Ⅱ 10は弱く外反する深鉢口縁部。外面端部に2段左撚の縄文をほどこす。Ⅱ 11とⅡ 12は縄文地の土器。Ⅱ 13は横方向の条線文の地文に、横方向の1条の沈線と縦方向で部分的に区切る沈線を加えた土器片。文様から注口土器の注口脇の体部と推測する。Ⅱ 14は注口土器の注口部下面。先がややすばまる外径約4cmの注口に復元できよう。外面は縦方向に磨きをほどこし、内面は縦方向の溝状に撫で調整を加える。Ⅱ 15～Ⅱ 18は無文の深鉢の口縁部。いずれもやや外反する形状を示す。

上層遺構出土土器（Ⅱ 19～Ⅱ 37） Ⅱ 19～Ⅱ 22は中期の縄文土器である。Ⅱ 19とⅡ 20は船元Ⅲ式の同一個体の土器。いずれも縄文地に半截竹管で平行沈線を描く。沈線の間隔は約5mmをはかる。SD7から出土した。Ⅱ 21とⅡ 22は里木Ⅱ式の土器で、SK31から出土した。Ⅱ 21は深鉢の口縁部。外面は撚糸文を地文とし半截竹管により平行沈線をほどこすが、沈線の間隔は約3mmと狭い。平行沈線は口縁直下が波状文であるほかは直線文である。内面にも撚糸文をほどこす。Ⅱ 22は地文が撚糸文である深鉢の胴部である。

後期の縄文土器としてはⅡ 23～Ⅱ 37がある。Ⅱ 23は縁帯文深鉢の口縁。稜より上に縦弧線をえがき、下に縦沈線をほどこす。SK30から出土した。Ⅱ 24～Ⅱ 26は同一個体とおもわれる土器。地文の縄文の上に斜格子沈線を加える。それぞれSK30、灰褐色土、SX1から出土した。Ⅱ 27は横走る多条沈線をほどこし、沈線間に縄文を充填した土器。攪乱からの採集。Ⅱ 28は半截竹管により斜位条線を密に引く。平行条線の間隔は約1.5mmとせまい。SK18出土。Ⅱ 29とⅡ 30は同一個体とおもわれる深鉢胴部片。弧状沈線の区画内を縄文で充填する。SK6とSK18の出土である。Ⅱ 31とⅡ 32はともに沈線渦文をもつ深鉢胴部下部分で、SD6と茶褐色土から出土した。Ⅱ 32は渦文内に縄文を充填する。Ⅱ 33は縄文地の深鉢胴部。SX9出土。Ⅱ 34とⅡ 35は無文の深鉢口縁部で、SD6から出土した。いずれも外面を削り、内面を撫でにより仕上げる。Ⅱ 36とⅡ 37は深鉢の底部でいずれも平底で

先史時代の遺跡



ある。II 36は底面から外反しつつ立ち上がるが、II 37はほぼ90°に立ち上がりすぐに外側に開く形状を示す。表土と茶褐色土から採集した。

石 器 (II 38) 東調査区のSD 6出土の石鏃。サヌカイト製で、長さ2.2cm、重さは0.7gをはかり、茎部先端を欠失する。形態からみて縄文晩期頃のものとおもわれる。

4 古墳時代～中世の遺跡

(1) 遺 構 (図26・30・31)

古墳時代の土坑 SK17とSK18は、西調査区の茶褐色土層中位で発見した土坑である。SK17は南側をSK18は東側を攪乱で切られているが、それぞれ幅60cm、長さ1.3m、深さ12cmと幅80cm、長さ2.2m、深さ28cmを検出した。隅丸長方形平面とみられる堀形のそれぞれ東端と西端からは、完形の須恵器蓋杯がそれぞれ1組と2組出土し、とくにSK17では杯身と杯蓋が重なって遺存していた。規模や遺物の出土状況から、墓であった可能性が高いと考えている。遺物から古墳時代終末期の7世紀前半ごろの遺構とおもわれる。

中世の溝群 SD 2～SD 7とSD 9～SD 11およびSD 13・SD 14は暗褐色土上面で検出した溝である。埋土はいずれも上層の茶褐色土を中心としたもので、砂が混じるものもある。

SD 3は東調査区から西調査区東半にまたがり、クランク状に屈曲してはしる溝で、総延長約40mを検出した。東西端は攪乱に切られていて不明であるが、西端は中世の南北方向のSD 2以西には続かず、東端は中世のSD 13とSD 14を結ぶ位置付近で止まる。幅は約70cmと狭いが断面U字形のしっかりとした掘り込みで、深さは最大で43cmをはかる。底面には北から南にわずかに勾配がついているが、水流の跡は認められない。土師器皿を中心とした遺物が出土した。

SD 5とSD 7はSD 3を切って「く」字形に折れてはしる溝である。東西方向のSD 5が約45°方向を振るSD 7におくられて掘られているが、埋土の状況や出土遺物などからほ

ほぼ同時期のものとみてよい。ともに幅2.8mで深さは1mを越える断面逆台形状の大型の溝であるが、SD5の西側3分の1は底面が一段高く30cmほど浅くなっている。SD5西端とSD7東端は壁状にたちあがり、隅丸方形に収まる。SD5からは土師器のほか瓦器の椀・皿が出土し、SD7からは鉢形の土師器と瓦器鍋・羽釜がまとも出土した。

SD4は溝SD3とSD7を切り、溝SD5と平行にはしる溝。西端は攪乱に切られて不明であり、東は発掘区外へと続いている。断面逆台形状で、幅約1.5m深さ約50cmをはかる。出土した遺物のうち、底部に糸切り痕をもつ大小の完形土師器が目目される。

SD6は東調査区から西調査区を横切り218地点にわたる、検出長60m余におよぼほまっすぐな溝。西端は攪乱に切られており不明。東はY=2310付近で止まるが、ここで屈曲して南に続く可能性もある。幅約2mで検出面からの深さは1.7mにもおよび、断面は鋭いV字形を示す。底面の標高は西にいくほど高く、東西端間で約50cmのレベル差をはかる。埋土からは土師器のほか瓦器の鍋や羽釜がまとも出土し、瓦類も多量に出土した。

SD10とSD11は西調査区南西部で検出した溝。攪乱に多くを切られており規模は不明な点が多い。ともに幅約1.5mをはかるが、検出面からの深さは20~30cmと浅い。遺物は土師器皿が少量出土した。

SD2とSD9は、西調査区のそれぞれ南半と北半で検出した南北方向の溝である。両者は一つの直線上に位置するが、SD6とSD4間では検出がなく連続する溝ではない。SD9の北側は調査区外へと続き、SD2の南は後世の削平により不明である。SD9は断面U字形のしっかりとした掘り込みで、幅1.2m検出面からの深さ40cmをはかり、SD2は幅50cmで深さ20cmと浅い。ともに埋土から土師器を中心とした遺物が少量出土した。

SD13とSD14は東調査区西辺で検出した南北方向の溝である。ともにしっかりとした

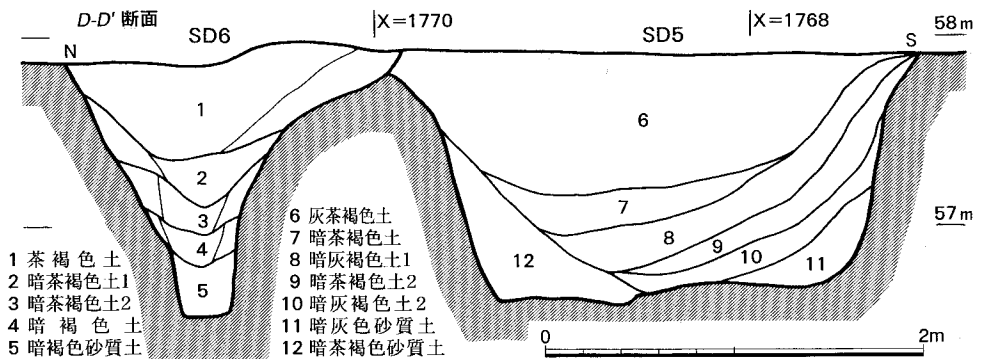


図30 SD5・SD6断面図 縮尺1/40

古墳時代～中世の遺跡

掘り込みの断面U字形の溝で、幅は1m深さはそれぞれ90cmと50cmをはかる。両溝は一つの直線上に位置し、南北端は調査区外へと延びるが、間は検出がなく途切れている。いずれも埋土からは土師器が少量出土した。

中世の土器溜 西調査区東南部のSX1のほかは、土器溜遺構は西調査区西南部に集中する。このうち溝SD10を切って掘り込むSX2は平面不整形形の掘形をもち、径3.5m検出面からの深さは40cmをはかる。埋土からは土師器皿の完形品が複数個出土した。祭祀に関する遺構とおもわれる。

そのほかの土器溜SX4～SX7はいずれもはっきりとした掘形をもたず、土師器の椀・皿を中心とした遺物がまとも出土するほか瓦類の出土も多い。またこのあたり一帯は茶褐色土層が周囲より一段低く落ち込んで堆積しているなかに密に遺物が包含されており、土器溜SX8として取りあげた。これらの遺構は隣接する218地点の土坑SX3やSX5と一連のものとおもわれるが、遺構の性格は不明である。

以上の土器溜遺構は、出土する遺物から13世紀後半の年代が与えられよう。

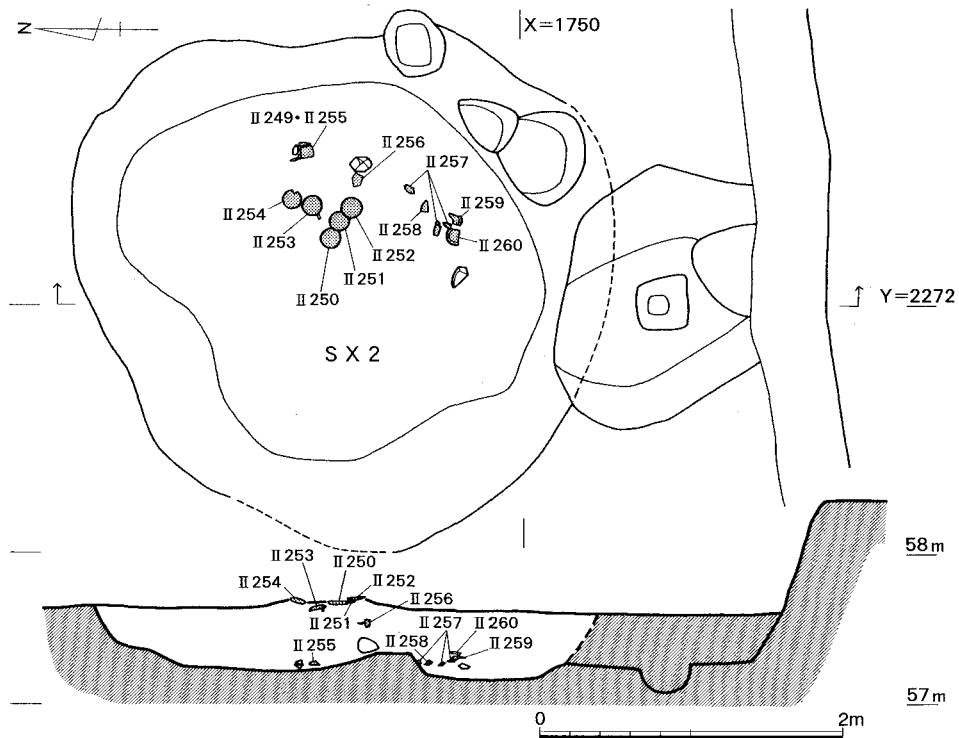


図31 土器溜 SX 2 縮尺1/50

(2) 遺物 (図版15~20, 図32~43, 表1・2)

以下、古代・中世の土器・陶磁器の基本的な分類は、平城宮〔奈文研76〕や京都大学構内遺跡〔京大埋文研81a〕における分類を踏襲し、遺物の年代観については『平安京提要』(1994年)および小森俊寛・上村憲章の編年〔小森・上村96〕を参考にした。比較的まとまった量の遺物が出土した遺構については、口縁部が1/12以上残存している資料を選択し、口縁部計測法により土器の種類別の比率と土師器の口縁部形態別の出土頻度とを算出し、項末に付した(表1・2)。また、遺物のうち瓦類に関しては次項でまとめて述べた。

古墳時代の遺物(Ⅱ39~Ⅱ46) 古墳時代の遺物には土坑SK17とSK18から出土した須恵器蓋杯のほか、中世の遺構から出土した須恵器長頸壺がある。Ⅱ39~Ⅱ44は須恵器杯身と杯蓋。杯蓋は天井部外面に小ぶりの宝珠形つまみがつき、内面のかえりは長く口縁端部より下方にのびる。杯Aの底部は篋削りしたあと未調整のまま、口縁部はやや外反する。Ⅱ45とⅡ46は須恵器長頸壺。前者はかるく張った体部肩に1条、頸部に2条2対の沈線をもち、後者は頸部に2条1対の沈線をほどこす。いずれも口縁部はわずかに外反しつつまっすぐに立ち上がり、口縁端部を丸く収める。内面には頸部と体部の接合の跡が明瞭に認められる。これらの遺物はTK209からTK217までのものであり〔田辺66〕、7世紀前半の年代に収まるであろう。

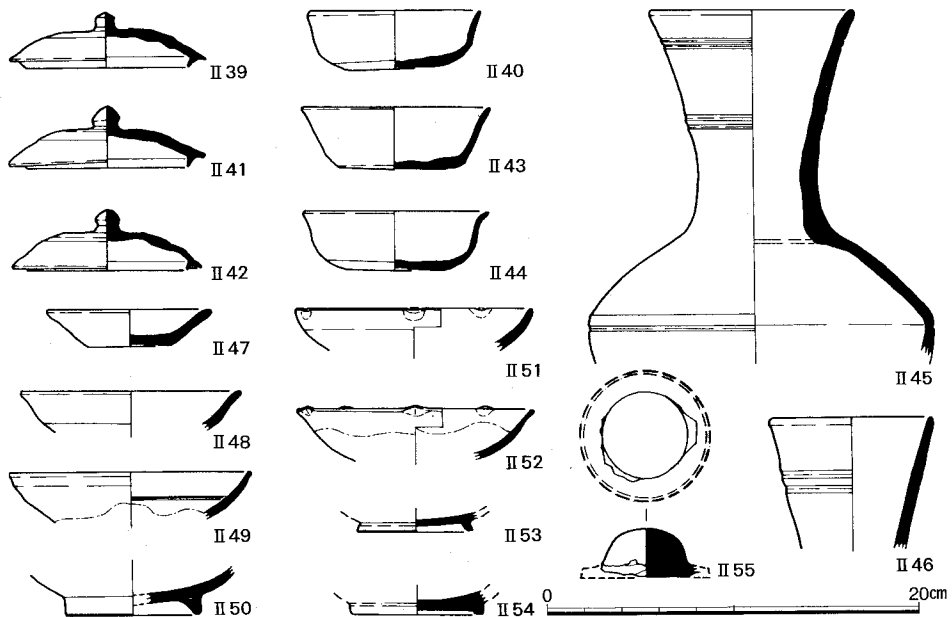


図32 SK17出土遺物(Ⅱ39・Ⅱ40須恵器), SK18出土遺物(Ⅱ41~Ⅱ44須恵器)
上層遺構出土物(Ⅱ45・Ⅱ46須恵器, Ⅱ47~Ⅱ52灰釉陶器, Ⅱ53~Ⅱ55緑釉陶器)

古代の遺物（Ⅱ47～Ⅱ55） 掲示した古代の遺物は、中世遺構から出土したものである。Ⅱ47～Ⅱ52は灰釉陶器。Ⅱ47は小型の皿。底部外面には回転糸切り痕がのこり、釉は内面のみかかる。Ⅱ48とⅡ49は椀の口縁部。後者は口縁端部をつまんで外反させる。Ⅱ50は椀の底部で、断面三角形のしっかりした高台を貼りつける。Ⅱ51とⅡ52は輪花椀の口縁部。Ⅱ53とⅡ54は緑釉陶器の底部。前者の高台は外反気味に開き、高台内面の釉を省略する。後者は蛇の目高台を削りだし、釉は全面にかかる。いずれも釉調は淡黄緑色である。これらは10世紀ごろの資料であろう。

中世の溝SD9からは饅頭形の緑釉円塔（Ⅱ55）が出土した。鐔の大半を欠失し、伏鉢は扁平な半球状を示す。胎土は精良で軟質。表面は丁寧に調整されるが伏鉢下部に型作りを示す細かい布目痕が残る。全体に磨耗しておりわずかに残る釉は淡黄緑色を呈する。大治3（1128）年白川法皇が供養した18万余基の円塔に比定されるものである〔西田25〕。

SD3出土遺物（Ⅱ56～Ⅱ72） Ⅱ56～Ⅱ69は赤褐色を呈する土師器皿。Ⅱ56～Ⅱ63が皿AⅡ，Ⅱ65～Ⅱ69は皿AⅠで、口径はそれぞれ10cmと14cmにピークがある。Ⅱ56・Ⅱ57・

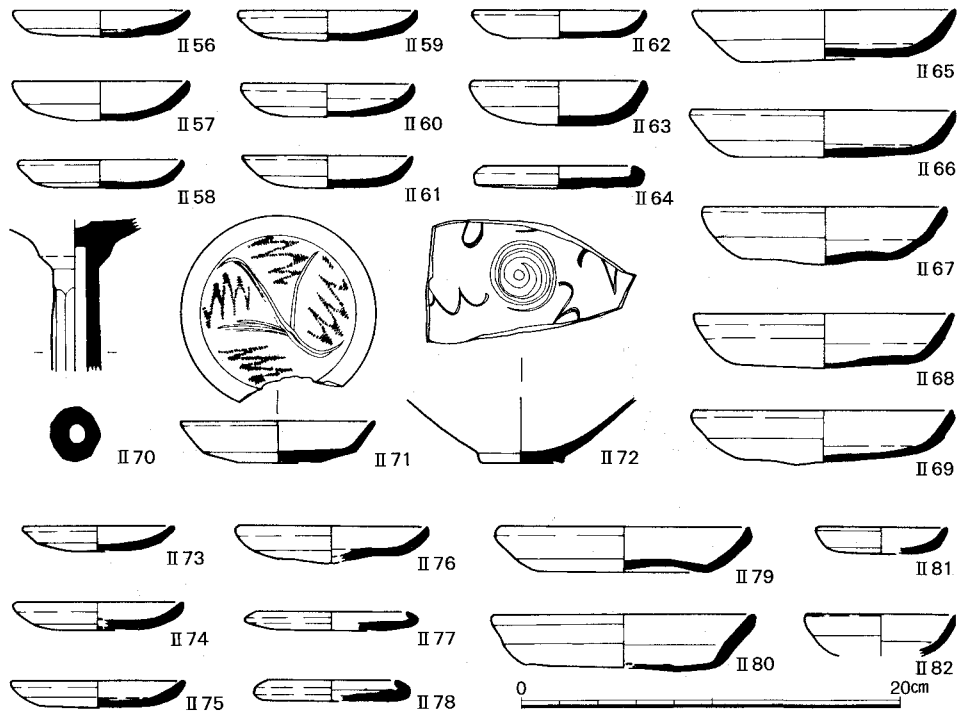


図33 SD3出土遺物（Ⅱ56～Ⅱ69土師器，Ⅱ70白色土器，Ⅱ71青磁，Ⅱ72青白磁），SK4出土遺物（Ⅱ73～Ⅱ82土師器）

京都大学本部構内 AX25・AX26 区の発掘調査

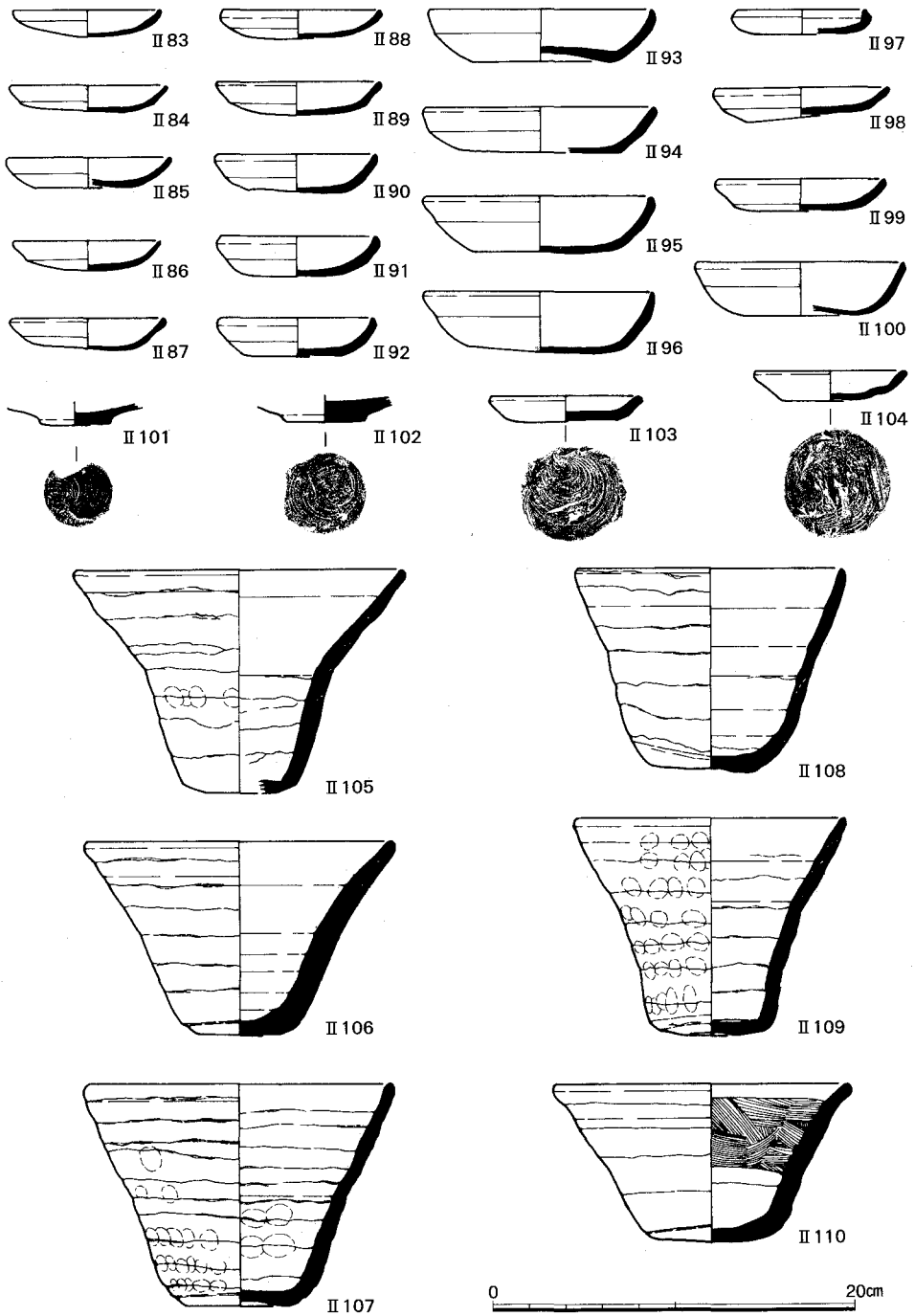


図34 SD 7 出土遺物(1) (II 83~ II 110土師器)

古墳時代～中世の遺跡

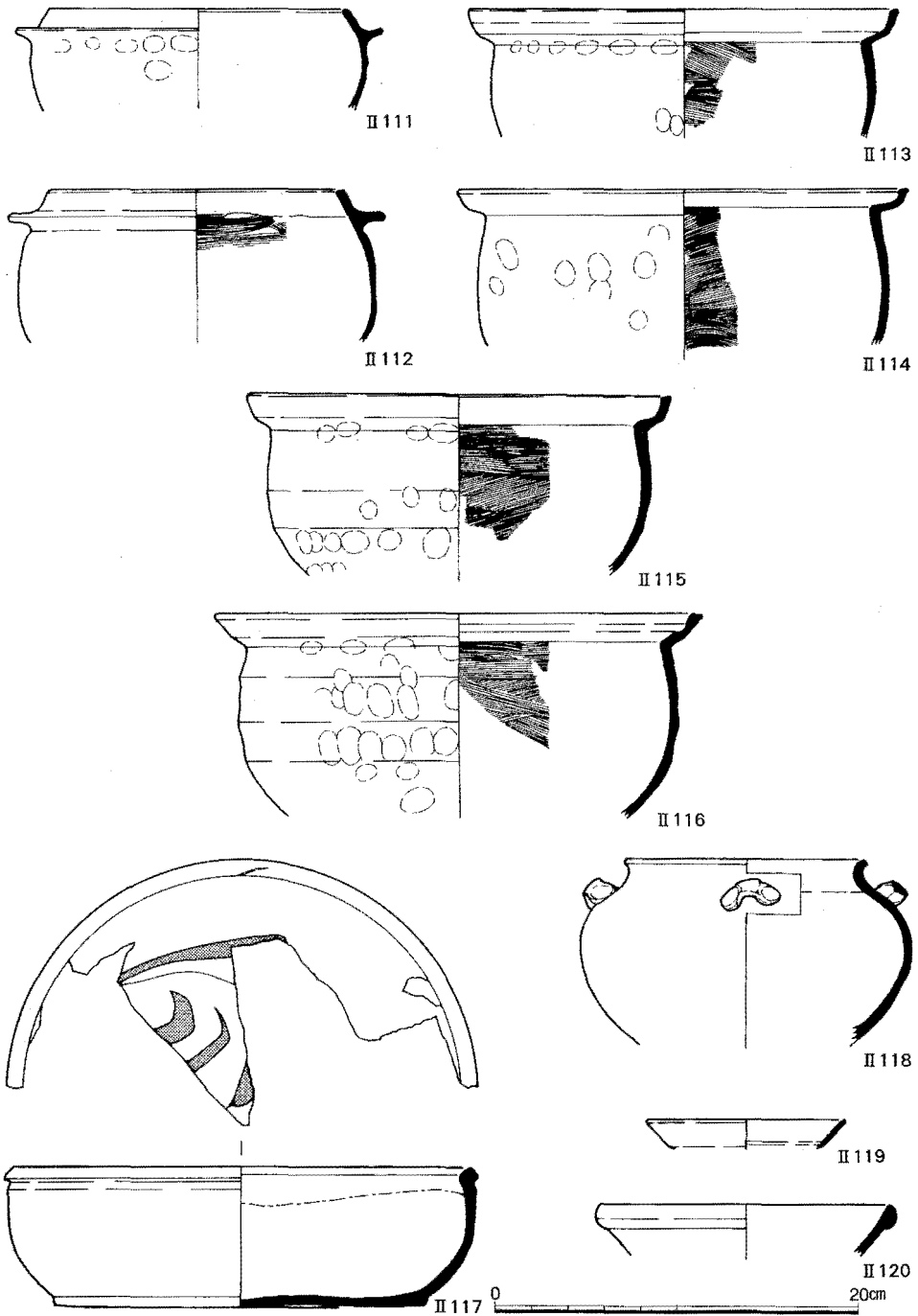


図35 SD 7 出土遺物(2) (II 111～II 116瓦器, II 117黄釉陶器, II 118褐釉陶器, II 119青磁, II 120白磁)

Ⅱ 65が素縁手法のD₃類で、その他は口縁端部に面取りをほどこす手法のD₄類とD₅類にあたる。Ⅱ 70は白色土器の高杯。外面を細かく面取りした脚部は円筒形の芯を用いた成形による。杯部は段を介して脚部と接合され、内面中央に小さなくぼみをもつ。Ⅱ 71は同安窯系の青磁小皿。体部中位で屈曲し、内面に篋による片彫りと櫛によるジグザグ文様をもつ。全面施釉ののち底部の釉を掻き取る。Ⅱ 72は青白磁の椀。内面中央に篋による片彫りの渦巻き状文様をもち、高台底面は無釉である。これらは12世紀後葉ごろの資料であろう。

SK 4 出土遺物 (Ⅱ 73～Ⅱ 82) Ⅱ 73～Ⅱ 80は赤褐色の土師器皿である。Ⅱ 73～Ⅱ 76は皿AⅡ。一段撫でて口縁端部に面取りをほどこし器形が丸みをおびるD₄類。Ⅱ 79とⅡ 80は皿AⅠで、器形が直線的なD₅類にあたる。Ⅱ 77とⅡ 78は受皿。Ⅱ 81とⅡ 82は灰白色を呈する小型の皿である。これらも12世紀後葉ごろのものとおもわれる。

SD 7 出土遺物 (Ⅱ 83～Ⅱ 120) Ⅱ 83～Ⅱ 110は土師器。Ⅱ 83～Ⅱ 92は赤褐色を呈する皿AⅡ。Ⅱ 83～Ⅱ 85がD₃類、Ⅱ 86～Ⅱ 89がD₄類、そのほかはD₅類で、口径は9cmにピークがある。Ⅱ 93～Ⅱ 96は赤褐色の皿AⅠ。すべてD₅類で13cmにピークがある。Ⅱ 97～Ⅱ 100は灰白色を呈する椀と皿である。Ⅱ 101とⅡ 102は灰白色を呈し、回転糸切り痕を残す底部。Ⅱ 103とⅡ 104も灰白色を呈するが、産地不明の皿。底部に回転糸切り痕を残し、内面には刷毛目調整痕をもつ。Ⅱ 105～Ⅱ 110は粘土紐を積み上げて成形した鉢形の土師器で、一般に塩壺と呼ばれているもの。体部半ばで屈曲して口縁が広がるものが多く、口縁部外面と内面を撫でて仕上げる。Ⅱ 110は器高も低く、内面は刷毛による調整を加えている。類例が110地点と143地点の調査で報告されている〔五十川83, 五十川・宮本88〕。

Ⅱ 111～Ⅱ 116は瓦器。Ⅱ 111とⅡ 112は羽釜で、そのほかは鍋である。いずれも体部が丸みを帯びた器形を示す。Ⅱ 117は黄釉陶器の盤。体部は軽く内湾し、口縁端部は断面菱形の玉縁状をなす。内面下半にのみに施釉され淡緑黄色を呈し、見込みには鉄釉で文様が描かれる。胎土は砂混じりで、堅く須恵質に焼成されている。Ⅱ 118は体部肩に耳をもつ褐釉陶器の壺。四耳壺に復元した。口縁部は外反し端部を丸く収める。Ⅱ 119は体部半ばで屈曲する器形の青磁皿の口縁部。Ⅱ 120は白磁椀の口縁部。口縁端部は玉縁状に収める。

以上の遺物は、13世紀前半の年代に収まるものであろう。

SD 4 出土遺物 (Ⅱ 121～Ⅱ 149) SD 4からは中世の遺構中もっとも多い126個体の遺物が出土した。このほとんどを京都産の土師器が占めるのは他の中世遺構と傾向を同じくするが、SD 4では回転台成形による搬入土師器の割合がとくに高く、約10%を占める。

Ⅱ 121～Ⅱ 146は土師器。このうちⅡ 121～Ⅱ 130は赤褐色の皿。Ⅱ 121～Ⅱ 123は皿AⅡで、

古墳時代～中世の遺跡

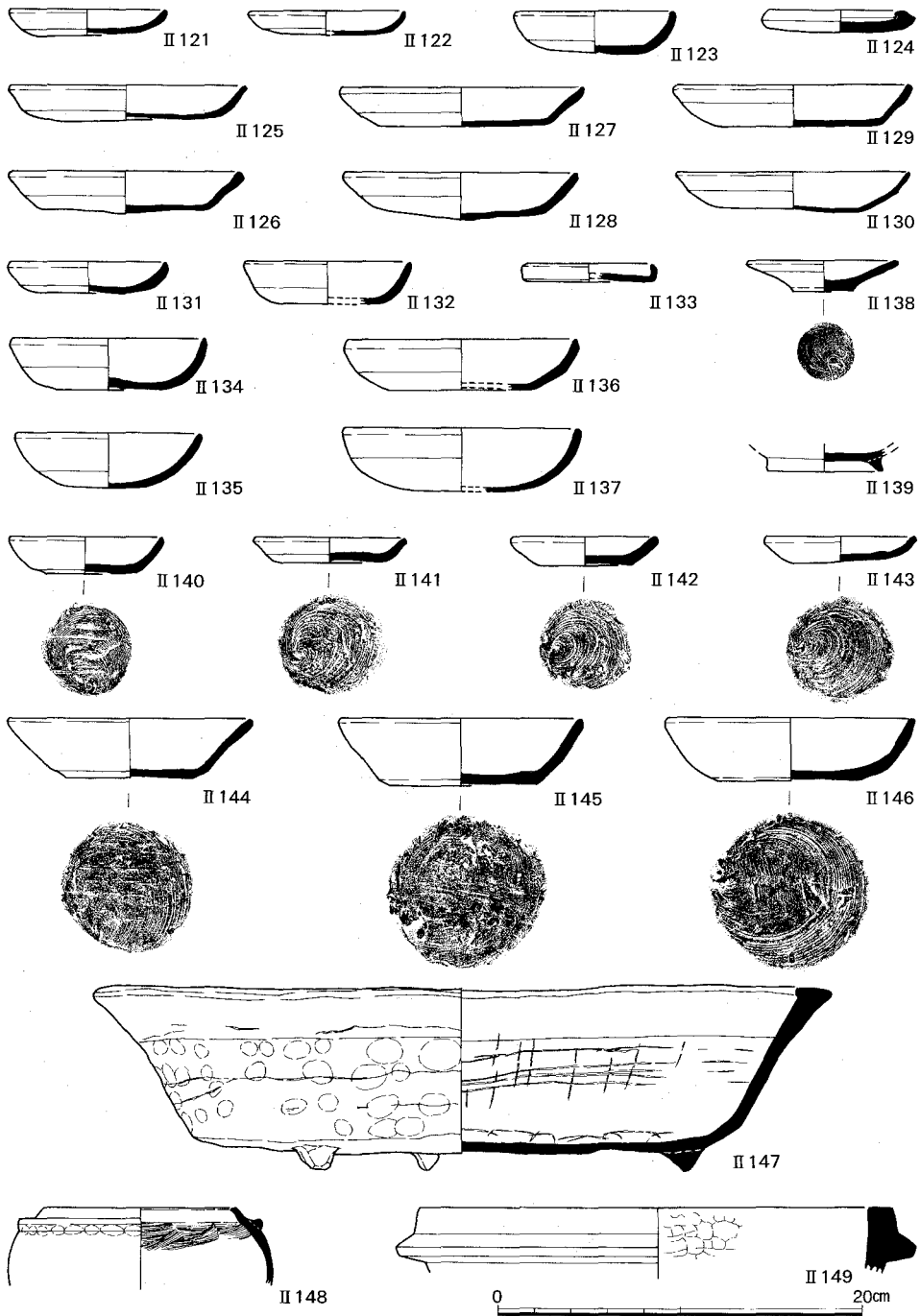


図36 SD4出土遺物（II 121～II 146土師器，II 147・II 148瓦器，II 149石鍋）

口径のピークは9cmにある。D₅類のⅡ123以外はD₄類である。Ⅱ124は受皿。Ⅱ125～Ⅱ130は皿AⅠで、ピークは13cmにある。Ⅱ125がD₄類、Ⅱ126～Ⅱ128がD₅類、Ⅱ129とⅡ130はD₅類と同様な特徴をもつが器壁が薄いD₆類にあたる。Ⅱ131～Ⅱ138は灰白色を呈する椀と皿。Ⅱ131は皿AⅡ、Ⅱ132は椀AⅡで、ともにD₅類。椀AⅡの口径は9cmにピークがある。Ⅱ133は受皿。Ⅱ134～Ⅱ137は椀AⅠで口径のピークは13cmにある。いずれもD₅類に属する。Ⅱ138は底部外面に回転糸切り痕をもつ皿。

Ⅱ139は一般に早鳥式土器と呼ばれる吉備系土師器椀の底部。胎土は3mm大の石英砂粒を含むもので、黄白色を呈するが、外面は煤の付着が多く黒色化している。Ⅱ140～Ⅱ146は底部外面に回転糸切り痕をもつ産地不明の土師器。Ⅱ140とⅡ144およびⅡ145は加えて板目の圧痕も残す。器形には小型の皿(Ⅱ140～Ⅱ143)と一回り大きい杯(Ⅱ144～Ⅱ146)の2種あり、前者は口径8～9cm器高約1.5cm、後者は口径13～14cm器高約3.5cmを中心とする。胎土は5mmの砂粒を含む粗いもので、色調は黄白色あるいは灰白色を呈し、内外面を撫で調整する。同様なものが中世の他の遺構および隣接する218地点からも出土しており、完形を多く含む土器が一括で出土する共通の傾向をもつ。

Ⅱ147は瓦器盤。体部は底部から屈曲して外反気味に立ち上がり、口縁端部は内側に肥厚する。Ⅱ148は小型の瓦器羽釜。丸みを帯びた器形で鐔が短く、三足釜である可能性もある。

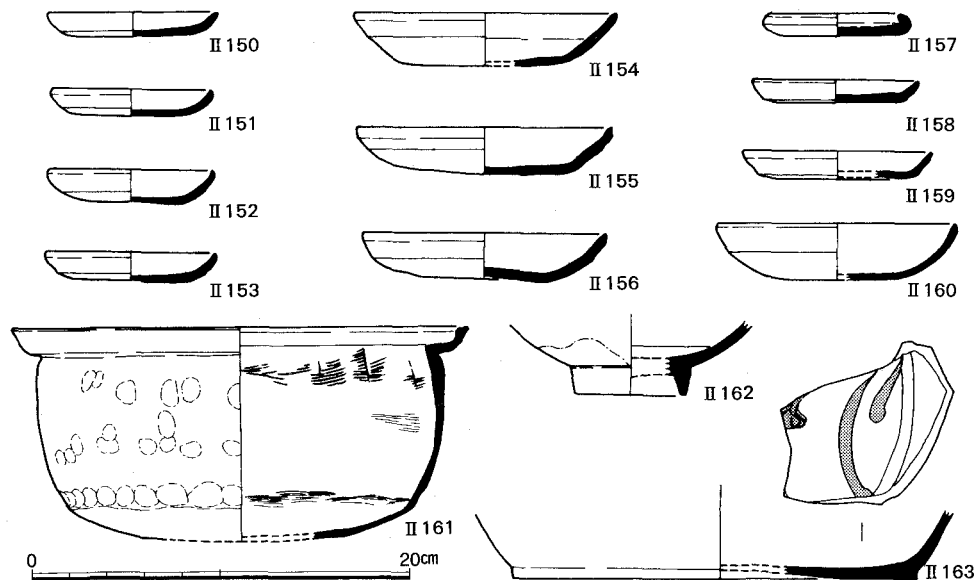


図37 SD5出土遺物(1) (Ⅱ150～Ⅱ160土師器, Ⅱ161瓦器, Ⅱ162白磁, Ⅱ163黄釉陶器)

古墳時代～中世の遺跡

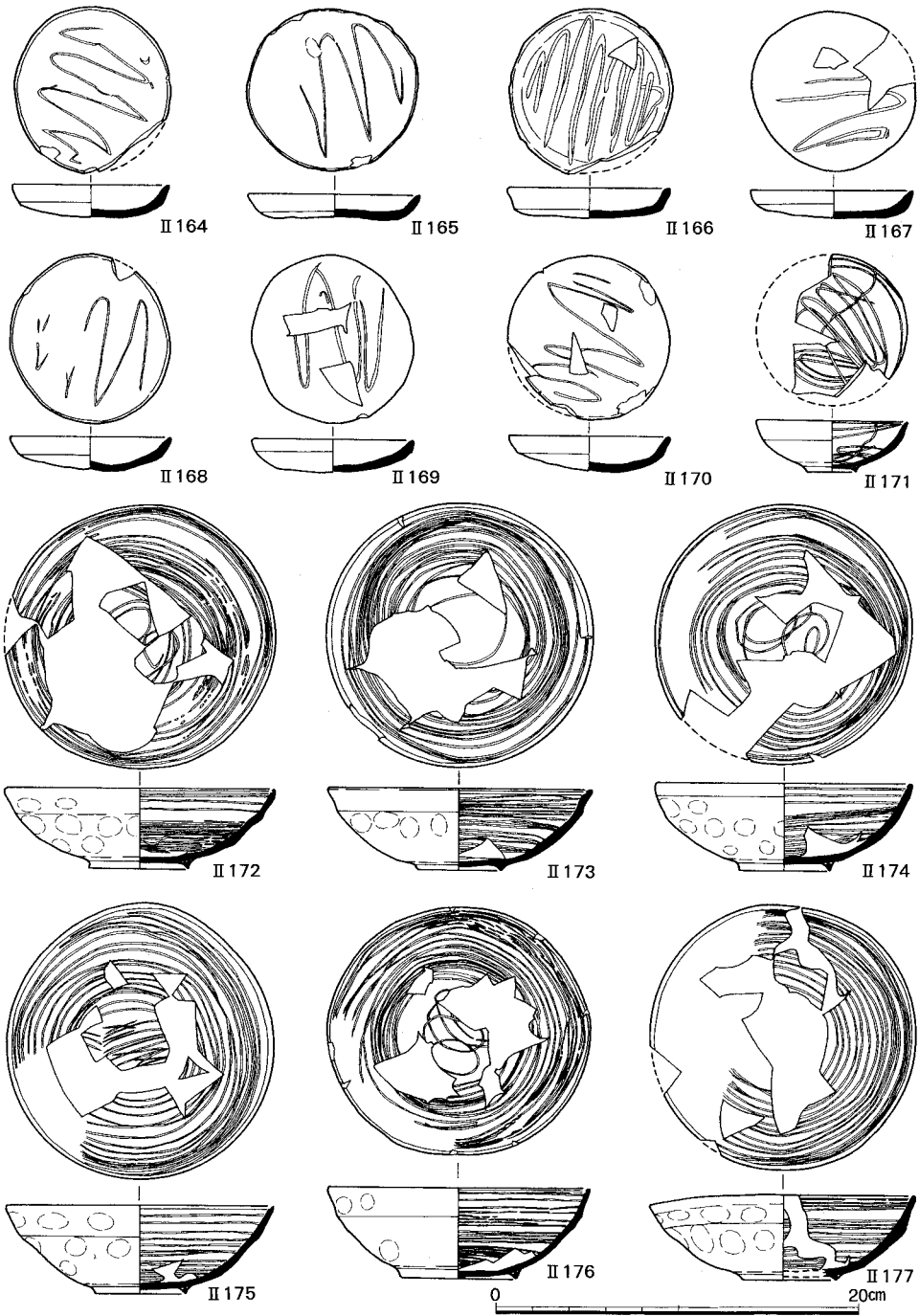


図38 SD 5 出土遺物(2) (II 164～II 177瓦器)

Ⅱ149は石鍋の口縁部で、滑石製である。

これらの遺物は13世紀前半ごろの資料であろう。

SD 5 出土遺物 (Ⅱ150～Ⅱ177) SD 5 からは76個体の遺物が出土したが、このうち20%を瓦器が占めており、他の中世遺構の器種構成と異なる。

Ⅱ150～Ⅱ160は土師器である。このうちⅡ150～Ⅱ156は赤褐色を呈す皿。Ⅱ150～Ⅱ153は皿AⅡで、9cmに口径のピークがある。Ⅱ154～Ⅱ156は皿AⅠで、ピークは14cmにある。Ⅱ150がD₃類、Ⅱ155がD₅類、そのほかはD₄類である。Ⅱ157～Ⅱ160は灰白色を呈する椀と皿。Ⅱ157は受皿。Ⅱ158とⅡ159は皿AⅡ。Ⅱ160は椀AⅠである。これらは13世紀前半ごろの資料である。

Ⅱ162は白磁椀の底部。高台は細く高く直立し、釉は省略される。Ⅱ163は黄釉陶器の盤。見込みに鉄絵の文様が描かれる。Ⅱ161とⅡ164～Ⅱ177は瓦器。Ⅱ161は鍋。口縁の2段の屈曲が鋭く、京都大学構内出土の煮沸土器をまとめた浜崎一志の編年によれば、13世紀前半ごろに比定できる〔浜崎84〕。Ⅱ164～Ⅱ170は皿。Ⅱ171は小型の椀。いずれも内面にジグザグ状の暗文が描かれる。皿は口径9cmを中心とし、器高は1.5～2cmである。Ⅱ172～Ⅱ177は椀。内面には連結輪状の篋磨きがほどこされ、外面の篋磨きは省略される。口径14.5～15cm、器高4.5～5cmの範囲に収まる。口縁部内面には沈線が刻まれ、高台は断面三角形の小さなものである。これらは、橋本久和のいう楠葉型瓦器椀のⅢ-1期に相当し、13世紀前葉ごろの年代が与えられよう〔橋本92〕。

SD 6 出土遺物 (Ⅱ178～Ⅱ218) SD 6 もSD 5 と同様に出土遺物の器種構成に瓦器の占める割合が多いが、SD 5 出土の瓦器が椀・皿中心であったのに対し、SD 6 は鍋・釜を中心とする。土器以外では瓦類が多量に出土したが、瓦については項を改めて述べる。

Ⅱ178～Ⅱ207は土師器。Ⅱ178～Ⅱ191は赤褐色を呈する皿。このうちⅡ178～Ⅱ184は皿AⅡで、口径のピークは9cmにある。Ⅱ186～Ⅱ191は皿AⅠでピークは13cmにある。Ⅱ178がD₃類、Ⅱ179～Ⅱ182とⅡ186がD₄類、Ⅱ183・Ⅱ184とⅡ187～Ⅱ189がD₅類で、Ⅱ190とⅡ191がD₆類である。Ⅱ185は受皿。Ⅱ192～Ⅱ203は灰白色を呈する椀と皿。Ⅱ192～Ⅱ195は皿AⅡ類。Ⅱ196とⅡ197は椀AⅡ類で、口縁のピークは8cmにある。Ⅱ197は内外面に横方向の篋磨きをほどこしてあり、瓦器の小椀である可能性もある。Ⅱ198は受皿。Ⅱ199は皿AⅠ。Ⅱ200～Ⅱ203は椀AⅠで、13cmに口径のピークがある。これらの灰白色の椀・皿はD₅類に属する。以上の土師器は13世紀中葉ごろの資料であろう。

Ⅱ204～Ⅱ207は底部外面に回転糸切り痕と板目圧痕をもつ産地不明の土師器で、灰白色

を呈する。SD 4 の II 140～II 146と同種である。ここでも、口径が14cm前後の杯（II 204・II 205）と約8.5cmの皿（II 206・II 207）の2種の器形がある。

II 208～II 213は瓦器。II 208とII 209は羽釜。ともに体部は丸みを帯び、口縁部は内傾する。II 210～II 213は鍋。II 210～II 212は体部に丸みがあり、口縁部の2段の屈曲があまく蓋受けの部分も傾斜しており、12世紀後半ごろの資料であろう。これらより新しい13世紀前半ごろの器形を示すのがII 213で、口縁部の屈曲は鋭く蓋受け部分も水平である〔浜崎84〕。鍋・羽釜とも内面を刷毛調整し、外面は指押さえ調整で煤が多量に付着する。

II 214は黄釉陶器の盤。体部は内湾し、口縁端部のみ外反肥厚し玉縁状をなす。II 215は灰釉系陶器の底部。内面は施釉され淡黄白色を呈する。II 216とII 217は白磁。II 216は口縁部が弱く外反する小皿。見込み底部の釉を輪状に掻き取り、外面は露胎である。II 217は端部が玉縁をなす碗の口縁部。II 218は鉄製の刀子。一端に握り部分とおもわれる木片が付着する。

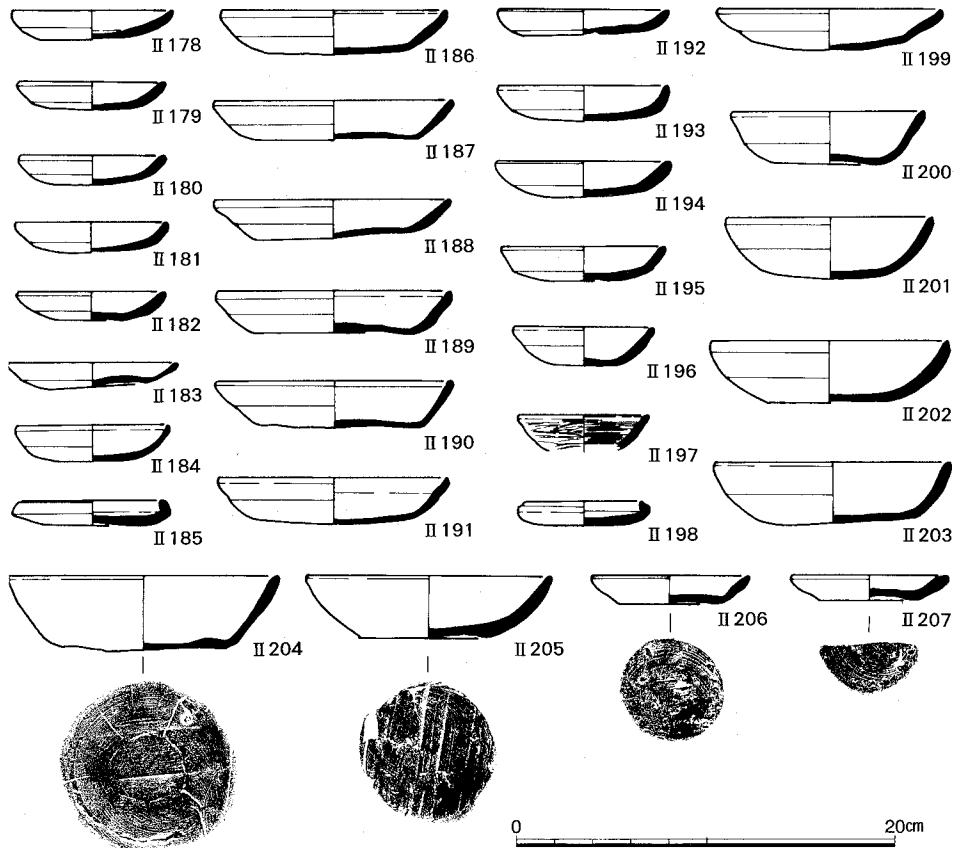


図39 SD 6 出土遺物(1) (II 178～II 207土師器)

京都大学本部構内 AX25・AX26区の発掘調査

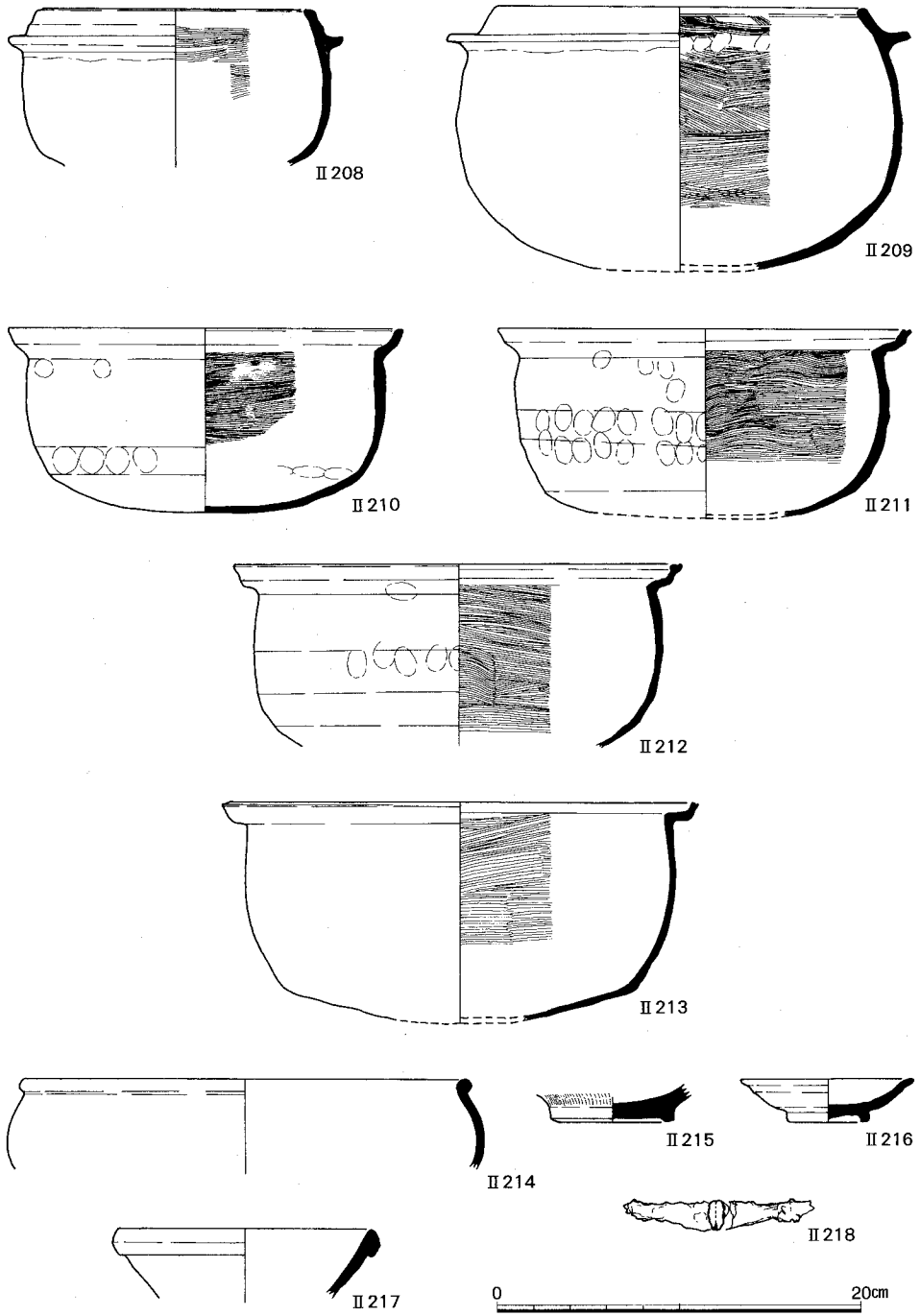


図40 SD 6 出土遺物(2) (II 208～II 213瓦器, II 214黄釉陶器, II 215灰釉系陶器, II 216・II 217白磁, II 218鉄器)

SD10出土遺物（Ⅱ219～Ⅱ221） 提示した資料はすべて赤褐色を呈する土師器皿で、D₄類に相当する。

SD11出土遺物（Ⅱ222～Ⅱ225） Ⅱ222～Ⅱ224は赤褐色を呈する土師器皿。Ⅱ224のみD₅類で、あとの2つはD₄類。Ⅱ225は青白磁の底部で、平高台の外表面は露胎である。

SD9出土遺物（Ⅱ226・Ⅱ227） Ⅱ226は赤褐色を呈する土師器皿で、D₅類に属する。Ⅱ227は白色土器の高杯。見込みに小さなくぼみをもつ。

SD2出土遺物（Ⅱ228～Ⅱ237） SD2からの出土遺物は大半が赤褐色を呈する大小の土師器皿であった。Ⅱ228～Ⅱ230は皿AⅡで、いずれもD₄類。Ⅱ231は受皿。Ⅱ232～Ⅱ236は皿AⅠ。Ⅱ233がD₄類、Ⅱ236がD₆類、ほかはD₅類に相当する。Ⅱ237は灰釉系陶器の底部。内外面とも体部上半のみ施釉する。

SX1出土遺物（Ⅱ238～Ⅱ247） 図示した資料はいずれも土師器。Ⅱ238～Ⅱ245は赤褐色の皿。Ⅱ238～Ⅱ243は皿AⅡで、Ⅱ238のみD₃類のほかはD₄類にあたる。Ⅱ244とⅡ245は皿AⅠで、ともにD₅類。Ⅱ246とⅡ247は灰白色の椀。D₅類に相当する。

SX2出土遺物（Ⅱ248～Ⅱ259） SX2からは図示したような赤褐色の土師器皿を中心とした遺物が出土した。Ⅱ248が皿AⅡ・D₄類であるほかは皿AⅠ・D₅類である。

SX4出土遺物（Ⅱ260～Ⅱ277） SX4からの出土遺物もほとんどが土師器の椀・皿であるが、灰白色の椀が比較的多い。Ⅱ260～Ⅱ267は赤褐色を呈する皿。Ⅱ260とⅡ261は皿AⅡで、それぞれD₃類とD₅類にあたる。口径の中心は9cmにある。Ⅱ262とⅡ263は受皿。Ⅱ264～Ⅱ267は皿AⅠで、13cmに口径の中心がある。Ⅱ267がD₆類であるほかはD₅類である。Ⅱ268～Ⅱ277は灰白色を呈する土師器。Ⅱ268が皿、Ⅱ272とⅡ273が受皿であるほかは椀である。椀の口径のピークは3つある。Ⅱ269～Ⅱ271は椀AⅢ、Ⅱ274とⅡ275は椀AⅡ、Ⅱ276とⅡ277が椀AⅠにあたり、それぞれ8cm、11cm、13cmにピークがある。このように白色系の土師器が口径別に3群にまとまる傾向は、SX5～SX8にも認められ、13世紀後半の様相を示すものである〔小森・上村96〕。

SX5出土遺物（Ⅱ278～Ⅱ301） 出土遺物は土師器が大半である。なかでも灰白色の土師器の比率が高く、約半数を占める。

Ⅱ278～Ⅱ300は土師器。Ⅱ278～Ⅱ286は赤褐色の皿で、すべてD₅類に属する。Ⅱ278～Ⅱ280は皿AⅡで、9cmに口径のピークがある。Ⅱ281～Ⅱ286は皿AⅠで、口径のピークは13cmにある。Ⅱ287～Ⅱ296は灰白色の椀と皿。Ⅱ287～Ⅱ290は皿AⅡで、D₅類に相当する。Ⅱ291とⅡ292は受皿。Ⅱ293～Ⅱ296はD₅類の椀。口径のピークは3つあり、皿AⅢ

京都大学本部構内 AX25・AX26区の発掘調査

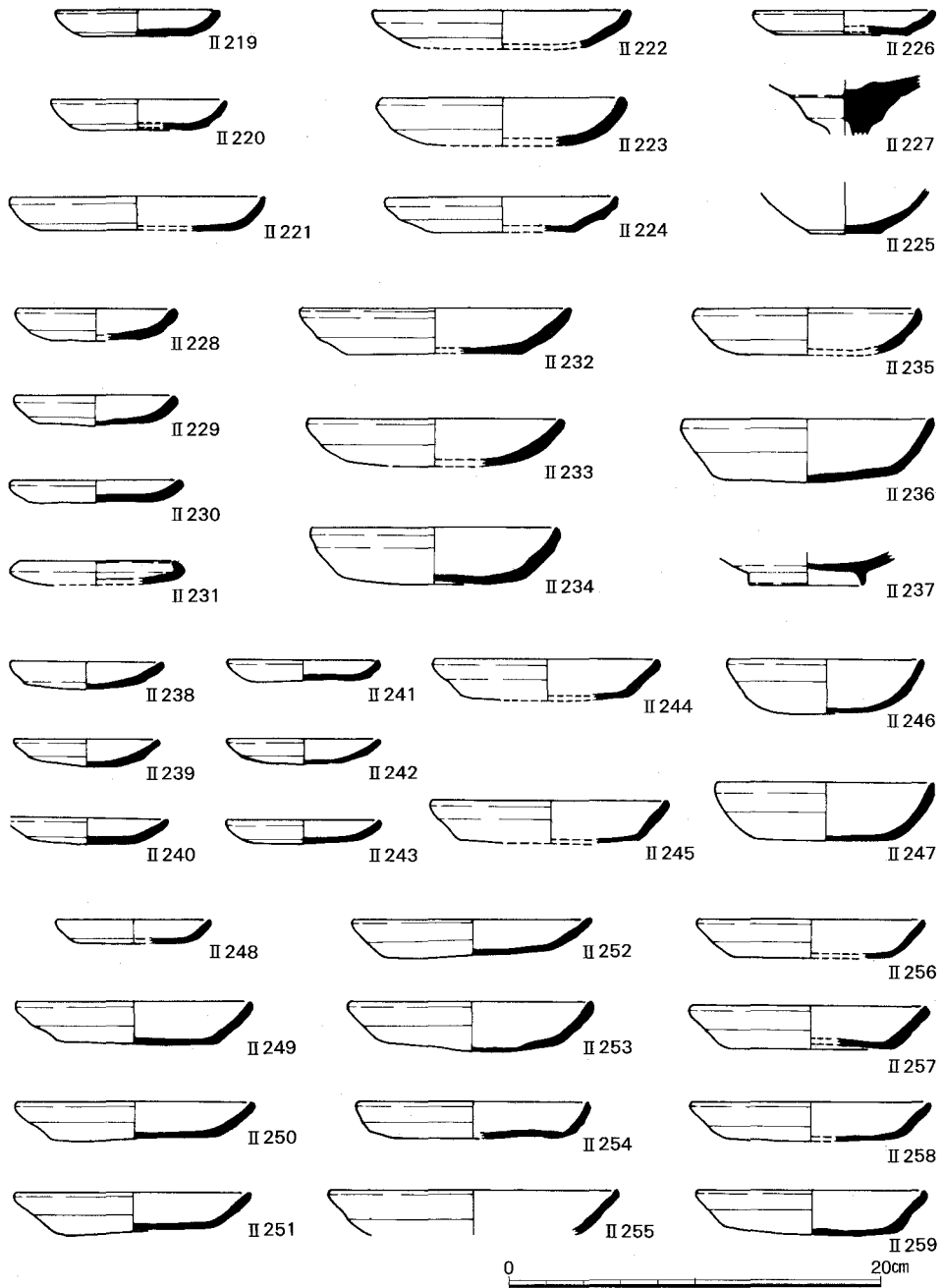


図41 SD10出土遺物 (II 219~II 221土師器), SD11出土遺物 (II 222~II 224土師器, II 225青白磁), SD 9 出土遺物 (II 226土師器, II 227白色土器), SD 2 出土遺物 (II 228~II 236土師器, II 237灰釉系陶器), SX 1 出土遺物 (II 238~II 247土師器), SX 2 出土遺物 (II 248~II 259土師器)

古墳時代～中世の遺跡

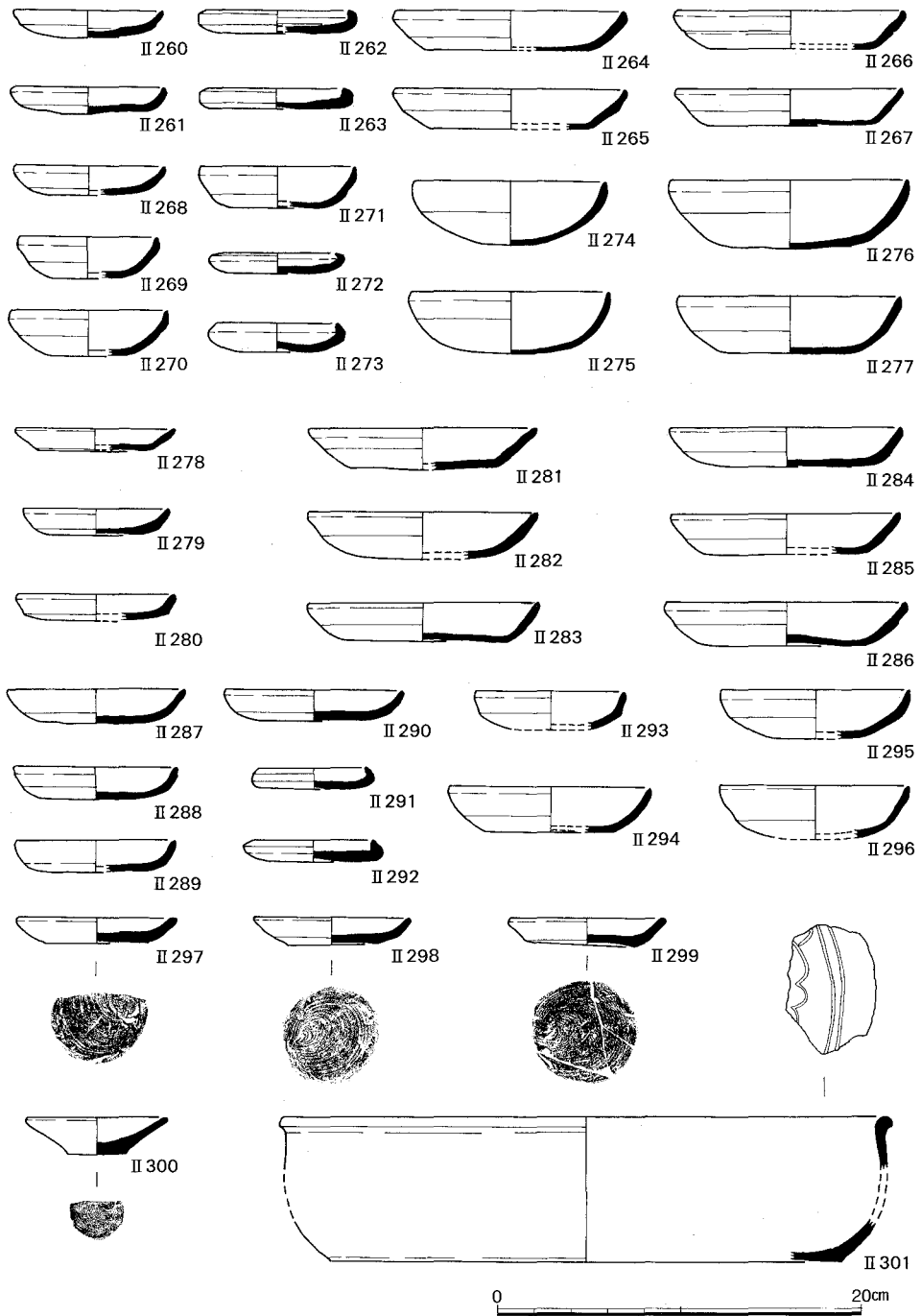


図42 SX 4 出土遺物 (II 260～II 277土師器), SX 5 出土遺物 (II 278～II 300土師器, II 301緑釉陶器)

(Ⅱ 293) は 8 cm, Ⅲ A Ⅱ (Ⅱ 294～Ⅱ 296) は 12cm, Ⅲ A Ⅰ は 14cm にそれぞれピークがある。Ⅱ 300 は糸切りの高台をもつ皿。色調は灰白色を呈し, 内外面とも回転撫で調整をほどこす。Ⅱ 297～Ⅱ 299 は底部外面に回転糸切り痕を残す土師器の小皿。SD 4 や SD 6 出土のものと同等品である。以上は 13 世紀後半ごろのものとおもわれる。

Ⅱ 301 は緑釉陶器の盤。口縁部と底部が出土し, 同一個体として復元した。底部外面のみ露胎とし, 色調は濃緑色を呈する。見込みには篋で釉を掻き取って文様を描く。体部と底部の境部の 2 条の線と底部の花弁状の文様がある。

SX 6 出土遺物 (Ⅱ 302～Ⅱ 320) Ⅱ 302～Ⅱ 317 は土師器。Ⅱ 302～Ⅱ 308 は赤褐色を呈する皿。Ⅱ 302～Ⅱ 304 はⅢ A Ⅱ でⅡ 306～Ⅱ 308 はⅢ A Ⅰ。口径のピークはそれぞれ 8 cm と 12 cm にある。Ⅱ 302 とⅡ 303 が D₄ 類であるほかは D₅ 類に属する。Ⅱ 305 は受皿である。Ⅱ 309～Ⅱ 314 は灰白色を呈する椀と皿で, D₅ 類に相当する。Ⅱ 309 とⅡ 310 はⅢ A Ⅱ。椀の口径のピークは 3 つあり, 椀 A Ⅲ (Ⅱ 311) は 8 cm, 椀 A Ⅱ (Ⅱ 312) は 10 cm, 椀 A Ⅰ (Ⅱ 313) は 12 cm にそれぞれピークがある。椀・皿とも SX 4 や SX 5 よりも小径化がすすんでいる。Ⅱ 314 は受皿。Ⅱ 315 は糸切り高台をもつ灰白色の小皿で, 体部が弱く内湾する。Ⅱ 316 とⅡ 317 は底部外面に回転糸切り痕を残す土師器。SD 4 や SD 6 出土のものと同じく, 灰白色を呈する。

Ⅱ 318～Ⅱ 320 は瓦器。Ⅱ 318 は小型の羽釜。内面は通常の刷毛による調整ではなく, 横方向の撫でによる。体部外面には煤が付着し, 実用に供されていたことがわかる。Ⅱ 319 は口縁部が内傾する羽釜。Ⅱ 320 は鍋。口縁部の屈曲はあまい。

以上の遺物は, 13 世紀前半に比定される瓦器鍋を除き, 13 世紀後半ごろの資料であろう。

SX 7 出土遺物 (Ⅱ 321～Ⅱ 332) 図示した土器はいずれも土師器である。Ⅱ 321～Ⅱ 323 は赤褐色を呈する皿。Ⅱ 321 はⅢ A Ⅱ で, D₄ 類。Ⅱ 322 とⅡ 323 は D₅ 類のⅢ A Ⅰ。Ⅱ 324～Ⅱ 328 は灰白色の椀と皿。Ⅱ 324 はⅢ A Ⅱ で D₅ 類。Ⅱ 325 は受皿。Ⅱ 326～Ⅱ 328 は D₅ 類の椀。Ⅱ 326 は椀 A Ⅲ, Ⅱ 327 は椀 A Ⅱ, Ⅱ 328 は椀 A Ⅰ。Ⅱ 329～Ⅱ 332 は底部外面に回転糸切り痕を残す産地不明の土師器。小型の皿 (Ⅱ 329) と大型の杯 (Ⅱ 330～Ⅱ 332) の 2 器種がある。

SX 8 出土遺物 (Ⅱ 333～Ⅱ 340) 土師器や瓦器を中心とした遺物のほか, 瓦類が多く出土した。Ⅱ 333～Ⅱ 339 は土師器で, このうちⅡ 333～Ⅱ 336 は赤褐色を呈する皿。Ⅱ 333～Ⅱ 335 はⅢ A Ⅱ で, Ⅱ 336 はⅢ A Ⅰ。D₄ 類のⅡ 335 のほかは D₅ 類である。Ⅱ 337～Ⅱ 339 は灰白色を呈する。Ⅱ 337 とⅡ 338 は受皿。Ⅱ 339 は椀である。Ⅱ 340 は瓦器羽釜の口縁部。

古墳時代～中世の遺跡

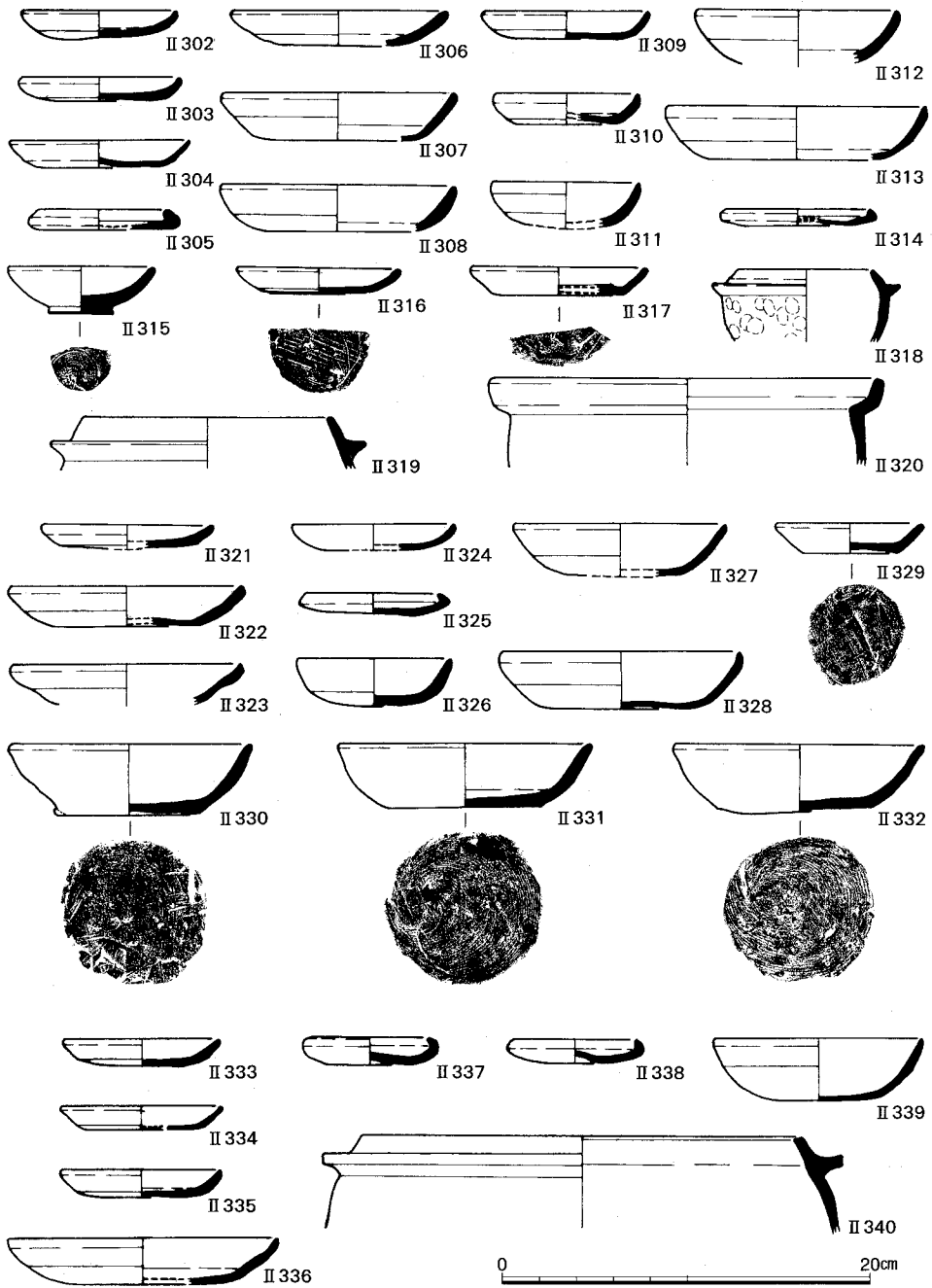


図43 SX 6 出土遺物 (II 302～II 317土師器, II 318～II 320瓦器), SX 7 出土遺物 (II 321～II 332土師器), SX 8 出土遺物 (II 333～II 339土師器, II 340瓦器)

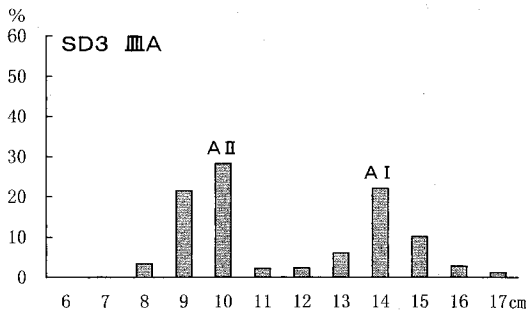
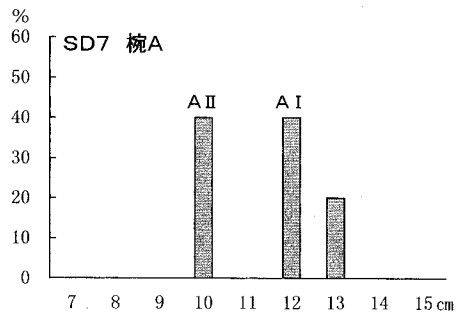
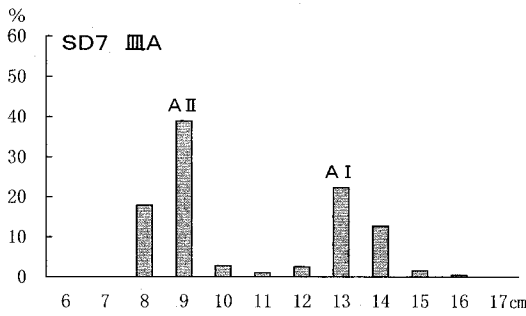
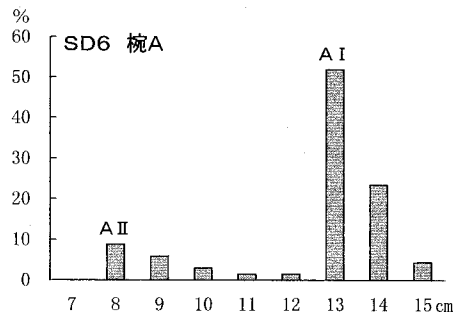
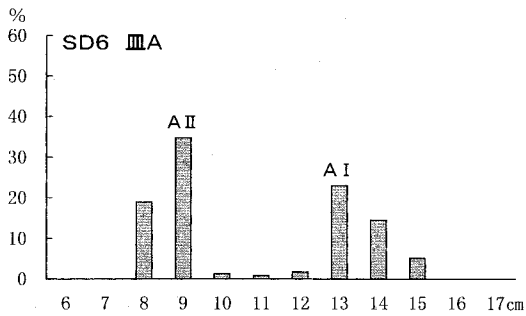
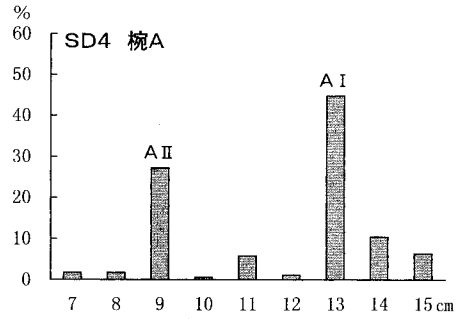
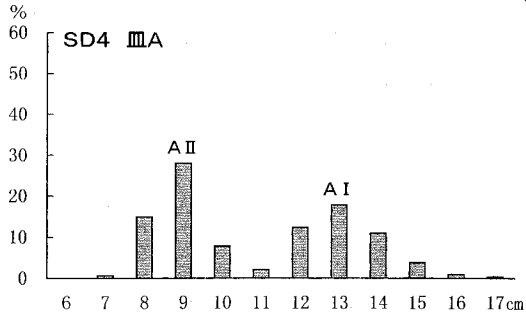
京都大学本部構内 AX25・AX26 区の発掘調査

表1 出土土器の計測結果(1)

種類別の比率		土師器口縁部形態の比率				
SD 4	126.5個体	SD 4	皿 A II	皿 A I	椀 A II	椀 A I
土師器 (椀・皿)	88.5%		50.3個体	47.3個体	4.5個体	9.9個体
搬入土師器	9.8%	D ₄ 類	91.1%	25.4%		
瓦器 (椀)	0.1%	D ₅ 類	8.9%	70.3%	100.0%	100.0%
瓦器 (盤)	1.3%	D ₆ 類		4.2%		
灰釉陶器 (椀)	0.1%	合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
陶磁器	0.2%					
輸入陶磁器 (白磁)	0.1%					
合計	100.0%					
SD 6	38.3個体	SD 6	皿 A II	皿 A I	椀 A II	椀 A I
土師器 (椀・皿)	84.0%		14.5個体	11.9個体	1.0個体	4.7個体
搬入土師器	2.0%	D ₄ 類	43.7%	22.0%		
瓦器 (椀)	0.7%	D ₅ 類	55.2%	65.8%	50.0%	100.0%
瓦器 (鍋・羽釜・火鉢)	12.2%	D ₆ 類		2.8%		
須恵器	0.2%	E ₁ 類			50.0%	
古瀬戸	0.2%	E ₂ 類	1.1%	9.4%		
輸入陶磁器 (白磁)	0.8%	合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
合計	100.0%					
SD 7	93.8個体	SD 7	皿 A II	皿 A I	椀 A II	椀 A I
土師器 (椀・皿)	88.1%		49.0個体	33.3個体	0.2個体	0.3個体
搬入土師器	4.1%	D ₃ 類	13.0%			
瓦器 (椀)	0.2%	D ₄ 類	66.4%	28.9%		
瓦器 (鍋・羽釜・盤)	6.1%	D ₅ 類	20.6%	69.7%	100.0%	100.0%
須恵器 (すり鉢)	0.1%	D ₆ 類		0.8%		
古瀬戸	0.1%	E ₁ 類		0.3%		
輸入陶磁器	1.3%	E ₂ 類		0.4%		
合計	100.0%	合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
SD 3	90.1個体	SD 3	皿 A II	皿 A I		
土師器 (椀・皿)	99.0%		49.2個体	40.0個体		
瓦器 (鍋)	0.1%	D ₃ 類	12.4%	2.3%		
輸入陶磁器 (青磁皿)	0.9%	D ₄ 類	79.6%	37.4%		
合計	100.0%	D ₅ 類	7.5%	57.6%		
		D ₆ 類		2.1%		
		E ₂ 類	0.5%	0.4%		
		E ₃ 類		0.2%		
		合計	100.0%	100.0%		

古墳時代～中世の遺跡

土師器口径の度数分布



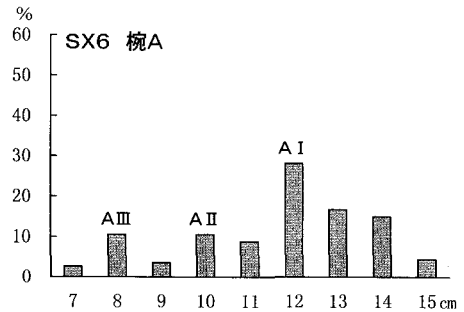
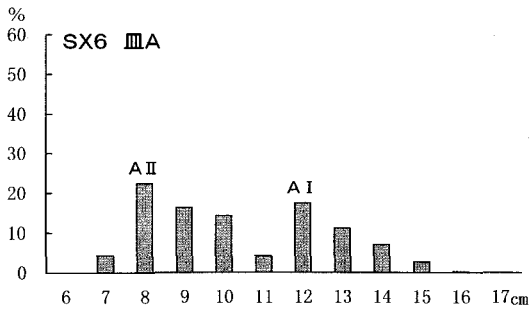
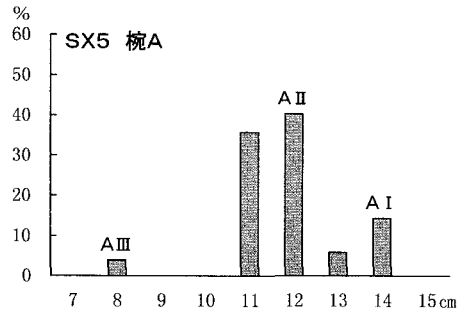
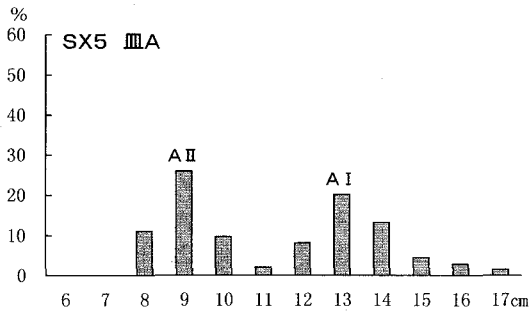
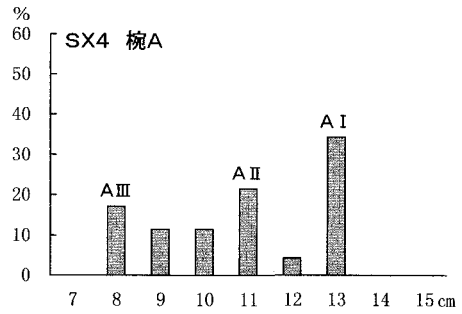
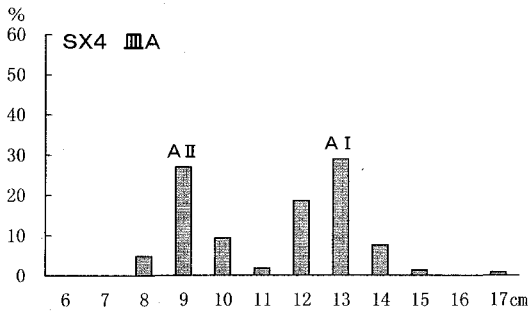
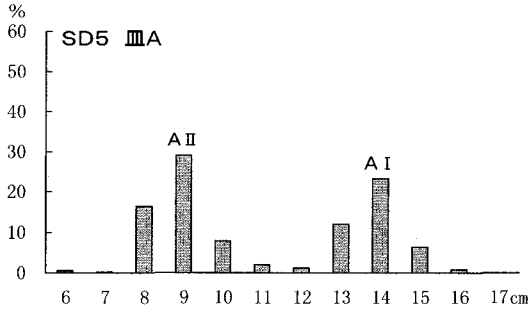
京都大学本部構内 AX25・AX26 区の発掘調査

表 2 出土土器の計測結果(2)

種類別の比率		土師器口縁部形態の比率					
SD 5	76.3個体	SD 5	皿 A II	皿 A I			
土師器 (皿)	79.6%		34.0個体	26.6個体			
搬入土師器	0.3%	D ₃ 類	1.7%				
瓦器 (椀・皿)	18.5%	D ₄ 類	92.5%	43.3%			
瓦器 (鍋・盤)	0.9%	D ₅ 類	5.8%	56.7%			
須恵器 (すり鉢)	0.1%	合計	100.0%	100.0%			
灰釉陶器 (椀)	0.1%						
輸入陶磁器	0.4%						
合計	100.0%						
SX 4	39.1個体	SX 4	皿 A II	皿 A I	椀 A III	椀 A II	椀 A I
土師器 (椀・皿)	99.6%		13.6個体	19.5個体	1.7個体	1.9個体	2.3個体
搬入土師器	0.4%	D ₃ 類	1.2%				
合計	100.0%	D ₄ 類	69.9%	17.9%			
		D ₅ 類	27.6%	79.1%	100.0%	100.0%	100.0%
		D ₆ 類		3.0%			
		E ₂ 類	1.2%				
		合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
SX 5	48.1個体	SX 5	皿 A II	皿 A I	椀 A III	椀 A II	椀 A I
土師器 (椀・皿)	94.8%		18.3個体	20.9個体	0.3個体	4.9個体	1.3個体
搬入土師器	4.8%	D ₄ 類	45.1%	14.7%			
瓦器 (鍋)	0.2%	D ₅ 類	54.0%	80.5%	100.0%	100.0%	100.0%
輸入陶磁器 (緑釉盤)	0.2%	D ₆ 類	0.9%	4.8%			
合計	100.0%	合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
SX 6	38.9個体	SX 6	皿 A II	皿 A I	椀 A III	椀 A II	椀 A I
土師器 (椀・皿)	95.8%		18.6個体	13.9個体	0.6個体	1.1個体	3.0個体
搬入土師器	3.0%	D ₄ 類	74.5%	25.1%			
瓦器 (椀)	0.2%	D ₅ 類	23.9%	69.2%	100.0%	100.0%	100.0%
瓦器 (鍋・羽釜)	1.0%	D ₆ 類	1.6%	5.1%			
合計	100.0%	E ₂ 類		0.6%			
		合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

古墳時代～中世の遺跡

土師器口径の度数分布



(3) 瓦 類 (図版21・22-1, 図44~47, 表3)

今回の調査では、軒平瓦28点、軒丸瓦42点のほか、整理箱7箱分の平瓦と丸瓦が出土した。瓦類の半数は中世の溝SD6から出土したが、東西調査区にわたる長い溝の各所からおおむね偏りなく出土した。SD6のほかは、SX8をはじめとした西調査区南西部の中世の土器溜からの出土が目立つ。

軒平瓦 (Ⅱ341~Ⅱ358) Ⅱ341~Ⅱ347は唐草文軒平瓦。Ⅱ341とⅡ342は同範。主莖が波状で、枝葉は渦巻き状をなす。凹面は布目痕、凸面は縄叩き痕が残る。瓦当頸部は指で横撫でされる。隣接する218地点から同範例が出土している。それぞれSX8とSD6出土。Ⅱ343は外区に珠文をめぐらせる。SD6出土。Ⅱ344は唐草文が崩れ波状をなす文様を単位とし、6単位に復元できる。凹面には細かい布目残り、篋記号が施される。SX7出土。Ⅱ345とⅡ346は波状の主莖から木の葉状の枝葉が派生する唐草文をもつ。Ⅱ345の凸面は斜格子叩き、凹面には布目が残る。Ⅱ346の瓦当頸部には折れ皺が残る、折り曲げ技法によるものである。それぞれSX8と茶褐色土出土。Ⅱ347は斜格子文で瓦当を飾るもの。SD6出土。以上の軒平瓦は平安時代末期から鎌倉時代前期の資料であろう。

Ⅱ348~Ⅱ358は剣頭文軒平瓦で、すべて折り曲げ技法による。Ⅱ348は剣頭を5単位並べる文様。凹面の布目は粗く側縁に面取りを施し、凸面は指押さえによる調整で一部布目が残る。SX5出土。Ⅱ349~Ⅱ351は剣頭の間隔が広く、6単位並べる文様に復元できよう。Ⅱ351の凹面には布目を残すが、Ⅱ349の布目は不明瞭で、Ⅱ350は布目を撫で消す。いずれも折り曲げのあと頸部を横撫で調整し、凹面には縦方向の撫でを加える。Ⅱ351が攪乱からの採集のほかはSD6出土。Ⅱ352~Ⅱ357は剣頭を7~8単位並べる文様に復元できるとおもわれる。Ⅱ352、Ⅱ356およびⅡ357は同範。凹面の布目は細かい。Ⅱ356はSX5出土、ほかはSD6出土。Ⅱ353~Ⅱ355もSD6出土。凹面の布目はやはり細かく、Ⅱ355は布端の圧痕が残る。Ⅱ354は凸面全面を指押さえにより調整し、瓦当裏面には一部布目を残す。Ⅱ358の文様は、中央に巴が頭部から反時計回りに尾を引く左廻り三巴文をおき、両側に剣頭を4単位ずつ配する。瓦当に篋記号状の2条の沈線を持ち、凹面の布目は粗い。SD6出土。これらの剣頭文軒平瓦は鎌倉時代中期ごろのものであろう〔上原95〕。

軒丸瓦 (Ⅱ359~Ⅱ373) Ⅱ359~Ⅱ361は蓮華文軒丸瓦。Ⅱ359は単弁4葉蓮華文。瓦当が薄く中房が段状に隆起するが、中房上には蓮子はない。全体に磨耗しており成形痕は確かでない。SD5出土。Ⅱ360とⅡ361は同範の単弁8葉蓮華文。中房に4+1の蓮子をもつ。瓦当裏面に掌圧痕と撫でが残る。それぞれSX8とSD5出土。Ⅱ362~Ⅱ373は三

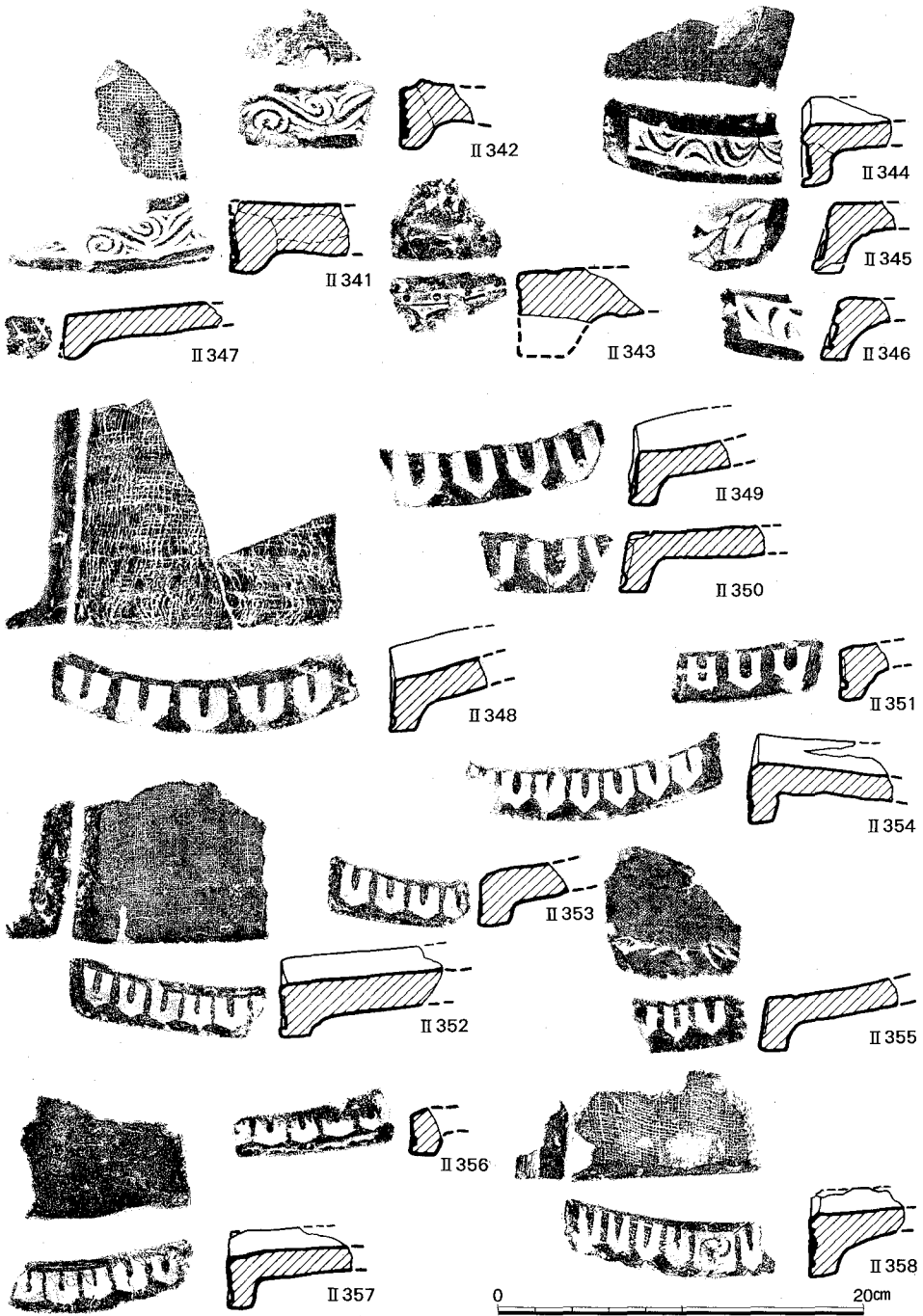


図44 軒平瓦 (II 341～II 358)

巴文軒丸瓦。SD 6 から出土したⅡ362～Ⅱ364は左廻り巴文で、巴は頭部から反時計回りに尾を引く。Ⅱ364は巴の頭部が大きい。Ⅱ363は瓦当側面に横方向の篔削りをほどこす。いずれも瓦当裏面は主に撫でて調整する。Ⅱ365の巴文は右廻りである。巴の尾は長く引き周縁に接する。SD 6 出土。Ⅱ366～Ⅱ372は左廻り巴文の周囲に珠文を配する文様をもつ軒丸瓦。SD 6 から出土したⅡ366～Ⅱ368は同範。巴・蓮子とも肉厚があり明瞭なもので、文様間の瓦当底面に瓦範の木目圧痕を残す。瓦当側面は横方向に削り、丸瓦部凸面は粗い撫でを加えている。同範の資料はほかに5個体出土した。Ⅱ369とⅡ370もSD 6 出土。Ⅱ371とⅡ372は内外区間に1条の圏線をほどこす。それぞれSX 4 と茶褐色土出土。Ⅱ372は珠文を密に配し、丸瓦部凸面は斜格子叩きをほどこす。Ⅱ373は1条の圏線で仕切った内区に右廻り二巴文をおき、外区に珠文を配する。胎土は砂粒が目立つ。SD 6 出土。

平瓦 (Ⅱ374～Ⅱ382) 平瓦は小破片が多く、全体の形状を知ることのできる資料はほとんどないが、凸面の叩き、凹面の調整、色調、厚さ、胎土などからA～Cに大別でき、数量を表3に示す。なお表3で計測に用いた資料は端部が残っているものに限り、うち隅部を有している資料の個数も付した。

- A 凹凸面に篔削りをしないものをA類とする。厚さは2.5cm前後と厚く、胎土は非常に精良。
- A 1 (Ⅱ374) 凸面に丁寧な撫でをほどこすもの。色調が灰色で須恵質に焼成されたものが多い。凹面は細かい布目が残る。
- A 2 (Ⅱ375) 凸面に明瞭な縄叩きをほどこすもの。凹面は布目のものと撫でるものがある。
- B 凹凸面を横方向に篔削りし、調整台との間に離れ砂を使用するものをB類とした。凸面調整には叩きをほどこすものと、そうでないものがある。
- B 1 (Ⅱ378) 凸面に縄叩きを加えるが、不明瞭なもの。凹面は糸切りのままのものと布目が残るものがある。厚さは1.8cm前後とやや厚い。胎土は精良で須恵質または硬質に焼成されたものが多い。篔記号は広端面に縦線1本の例が多い。
- B 2 (Ⅱ379) 凸面を斜格子叩きするが、やはり不明瞭なもの。凹面は布目を残すものと撫でを加えるものがある。胎土は粗い砂粒を多く含む。厚さは1.5cm前後。
- B 3 (Ⅱ380) 凸面に平行叩きをほどこすもので、図示した1例のみ。凹面は細かい布目残り、須恵質に焼成される。
- B 4 (Ⅱ381) 草花状の文様が刻んである叩き板で、凸面に叩きをほどこすもの。こ

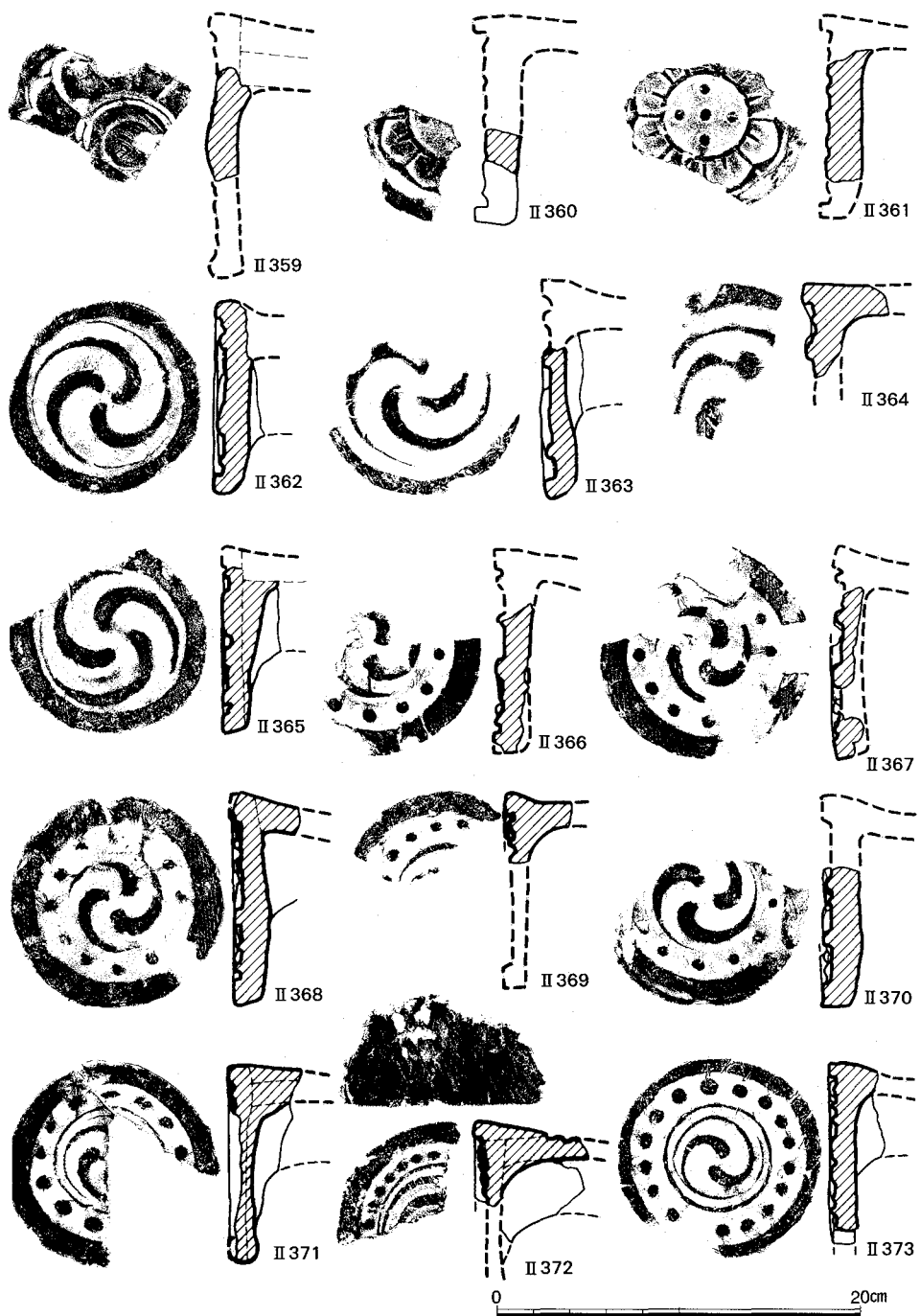


図45 軒丸瓦 (II 359～II 373)

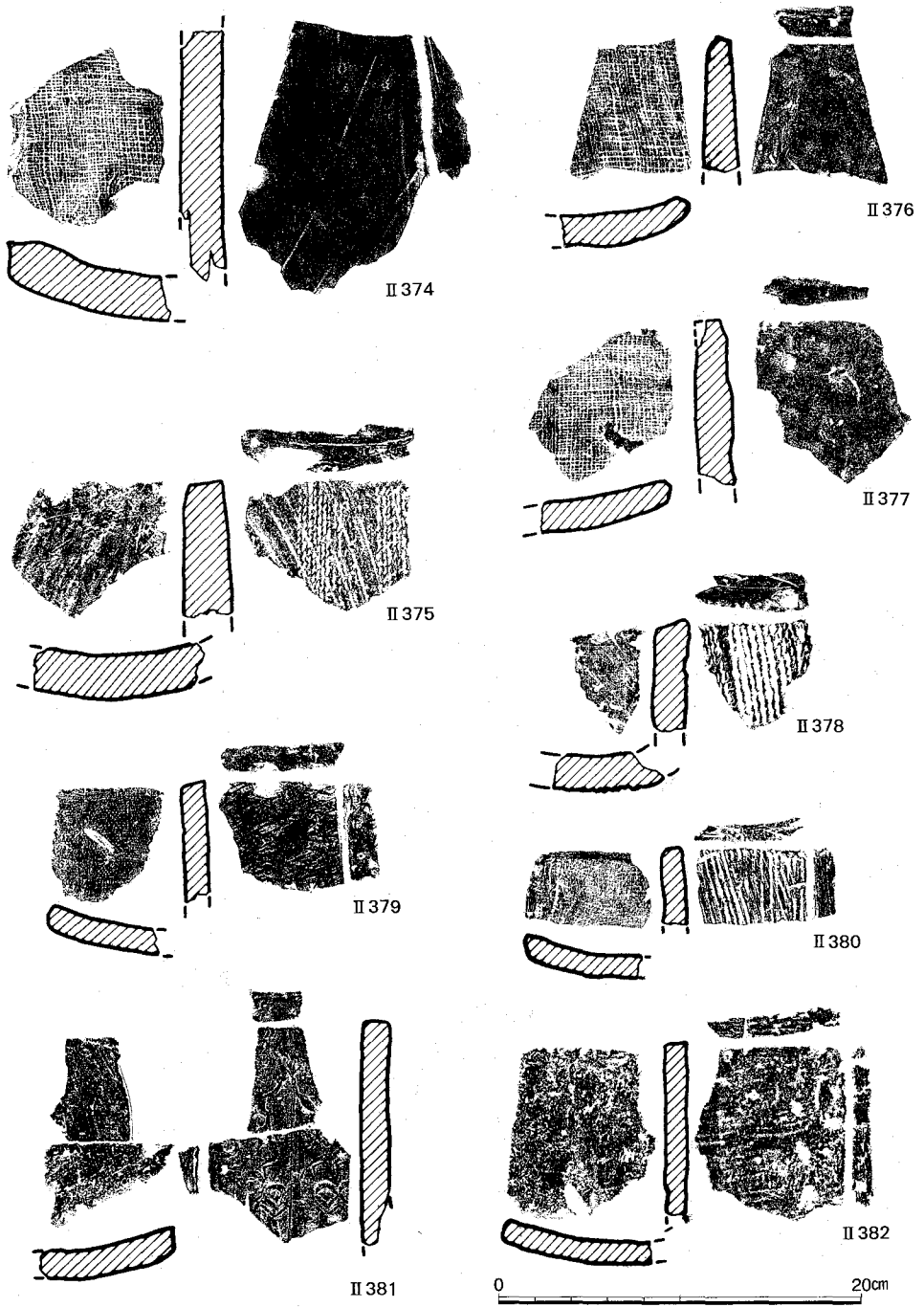


図46 平瓦 (II 374~II 382)

古墳時代～中世の遺跡



図47 丸瓦 (II 383～II 385)

れも1例のみ。凹面は糸切り。色調は灰黒色。

B 5 (II382) 凸面に叩きをほどこさず糸切りのままか、調整が不明なもの。

C 凸面を撫でまたは指押さえにより調整したものをC類とした。厚さは薄く1cm前後。灰黒色を呈するものが多い。範記号は広端面の縦1本線の例が多いが、V形やX形、あるいは凹面の1本線の例もある。

C 1 (II376) 凸面に丁寧な撫でをほどこすもので、凹面は撫でるか糸切り痕や布目が残るものがある。

C 2 (II377) 凸面を指押さえにより調整するもの。凹面は粗い布目が残る。

丸瓦 (II383~II385) 丸瓦も小片が多いが、凸面の叩き、凹面の調整、胴部の厚さ、胎土、色調から、A~Cに大別でき、表3に数量を示した。

A (II383) 凸面を撫で調整するもの。凹面は布目が残るものと撫でを加えるものがある。灰色で須恵質に焼成されるものが多い。厚さは1.5~1.8cm。

B (II384) 凸面に深い斜格子叩きをほどこすもの。凹面に残る布目は非常に粗いものが多い。胎土は粗い砂粒を多く含み、色調は赤褐色または灰色を呈する。厚さはA類と変わらない。

C (II385) 凸面を縄叩きするものをC類とした。丸瓦の大半を占める。凹面に残る布目が粗いもの(C1)と細かいもの(C2)、および凹面に糸切り痕が残るもの(C3)に細分される。玉縁部外面は撫で、端部凹面側を面取りする。色調は灰色か赤褐色を呈し、厚さは1.3~1.6cmとやや薄い。

表3 平瓦・丸瓦の分類別出土点数

平瓦				丸瓦			
分類	破片数	隅部点数	範記号	分類	破片数	隅部点数	範記号
A 1	2			A	5	2	
A 2	1			B	14	1	1
B 1	45	13	12	C 1	41	5	5
B 2	12	4		C 2	29	8	1
B 3	1	1		C 3	8	1	1
B 4	2						
B 5	173	72	16				
C 1	36	11	3				
C 2	4	1					
計	276	102	31	計	97	17	8

5 近世・近代の遺跡

(1) 近世の遺跡と遺物 (図48・49)

東調査区と西調査区の北半は攪乱や削平が著しく確かではないが、遺構の密度は低い。近世の遺構は西調査区南半に集中する。検出した遺構は耕作にともなうものであり、野壺と柵列がある。

野壺 SE1～SE3は径約1.5mの漆喰づくりの野壺である。SE4はSE1を掘りなおしてつくられた素掘りの野壺。

柵列 検出した柱穴は大きき10～15cmの方形または円形の掘形で、2.5m間隔で東西に並ぶものがあり柵列とした。方位は真北から西に約3°振り、隣接する218地点で検出した柵列ともよく符合する。

さて、京都大学本部構内には幕末に尾張藩邸が置かれ、本調査区付近は馬場付近にあたると推測されるが、今回の調査では確認できなかった。今後の周辺の調査に期待したい。

近世の遺物は整理箱4箱に収まる量が出土した。土師器、陶器、磁器、瓦類、土製品(泥面子・伏見人形)、鉄釘、銭貨などがある。II 386～II 389はSE1出土遺物。II 386と

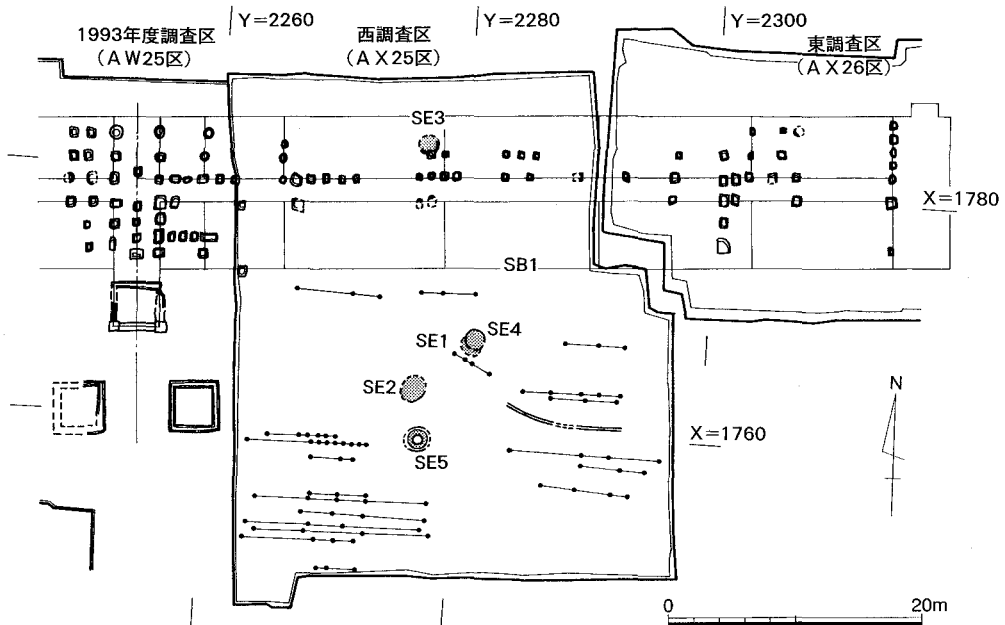


図48 近世・近代の遺構 縮尺1/600

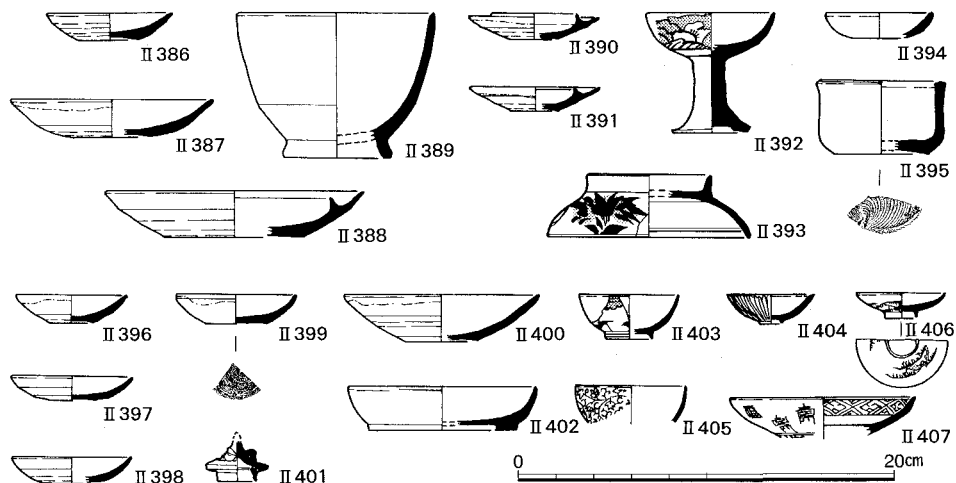


図49 SE 1 出土遺物 (II 386～II 389 陶器), SE 2 出土遺物 (II 390・II 391 陶器, II 392 磁器), SE 3 出土遺物 (II 393 染付), SE 4 出土遺物 (II 394・II 395 土師器), 灰褐色土出土遺物 (II 396～II 403 陶器, II 404 白磁, II 405～II 407 染付)

II 387は陶器の皿で、体部外面は無釉である。II 387の口縁部には煤が付着する。II 388は陶器の灯明皿。II 389は腰折れ形の陶器椀で、体部下半は無釉。II 390～II 392は SE 2 出土遺物。II 390とII 391は陶器の灯明皿。II 392は磁器の色絵仏飯器。畳付の釉を掻き取る。II 393は SE 3 出土遺物で、染付椀の蓋。外面に草花文、見込みに圈線を描く。見込み中央の文様は欠落により特定できない。II 394とII 395は SE 4 出土遺物。II 394は型作りの土師器皿。見込みに離型剤の雲母が付着する。II 395は土師器の筒形容器。底部外面に糸切り痕を残す。II 396～II 407は灰褐色土出土遺物。II 396～II 400は無高台の陶器皿。いずれも外面は無釉である。II 401は陶器の蓋。II 402は蛇の目凹形高台をもつ盤形陶器皿。II 403は陶器小椀。体部外面の文様は染付風である。II 404は白磁紅猪口。II 405は染付椀。外面を繊細な唐草文でうめる。II 406とII 407は染付の皿。II 407は外面に福文と壽文をちらす。

(2) 近代の遺跡 (図48)

近代の遺構は井戸と建物がある。井戸 SE 5 の上部は後世に破壊されており、黒褐色土上面で初めて検出した。井筒は深く、約 3 m 掘り下げたところで底部に届かず、掘削を中止した。径 1.8 m の円形の掘形に、型作りの円筒形の漆喰を積み重ねて置き、井筒とする。漆喰は径 1 m、高さ 60 cm、厚さは 9 cm をはかる。

西調査区の北半と東調査区の表土下面で、方 70 cm の方形の掘形に割栗石を充填した建物基礎を多数検出した。隣接する AW25 区の調査でも同様な遺構が発見されており、京都大

小 結

学の前身である第三高等中学校の吉田学舎が明治20年に建設された際、この地付近に設置された寄宿舍に比定されている〔千葉ほか97〕。今回検出した建物SB1はこれに連続するものであり、その配置をより正確に把握することができた。『官報』第1867号（明治22年9月17日）の竣工報告によれば、寄宿舍は木造3階建ての中廊下式である。また『第三高等中学校全図』〔神陵史資料研究会編94〕や明治30年の新設にともなつてこの建物を引き継いだ京都帝国大学の創立間もない頃の配置図『京都帝國大學略図』〔京都大学百年史編集委員会編98〕には、東西に長い左右対称平面の寄宿舍の姿を認めることができる。これらを勘案すれば、AW25区検出の基礎列が寄宿舍の中央部分にあたり、この南に位置する真々4.5mの3箇所の方形布基礎跡が玄関車寄せと玄関両脇の付属屋で、東に長くのびる本調査区検出部分が寄宿舍の東翼に相当するものとおもわれる。建物全体の規模は不明であるが、中央南北軸から東端の基礎列まで約60mをはかり、西翼部分も同様の規模をもつものとするれば、桁行き120m以上の大規模な建物となる。図48には想像される規模を示しておいた。建物の方位は真北から西に4°振っており、現在の本学の建物配置と一致する。

6 小 結

(1) 中世の溝と土地利用

古代には遺構・遺物とも希薄だった京都大学本部構内は、およそ13世紀を画期として14世紀ごろまでの人びとの活動の痕跡が各所で認められるようになる。これまでに判明した中世前半の遺構として、まず本部構内を北西から南東に横切る中世志賀越え道があげられる（90・168地点）。この道に近い北側に掘立柱建物（90地点）、井戸（90・218地点）、大土器溜（90・181地点）があり、南側には掘立柱建物・井戸（124地点）、木棺墓・土壙墓（75地点）がある。また砂取り穴がこの道に近接した南北（90・110・168・214地点）と南方（89地点）に存在する。このほか溝や土坑および土器溜が各地点で認められ、発見される遺物の量も古代に比較して飛躍的に多くなる。

今回調査した地点は中世志賀越え道の北側約80mに位置し、12世紀後葉から13世紀代の遺物を包含する溝群や土器溜を検出した。溝群は西調査区の南半を中心に多様な形態のものが複雑に交錯する。溝には東西方向のものとそれに直交するものがあり、現在の国土座標とほぼ方位を同じくする。ただ溝SD6はほかの溝とは方位を少しく異にしており、中世志賀越え道を意識してこれに平行に掘られたものであろう。出土する遺物の時期や切り合いからSD6は他の溝からやや遅れて掘られたことがわかっており、この地の土地利用

の基準方位が、正方位から中世志賀越え道の方向を基準とする方位へ変わっていった可能性も指摘できよう。

溝以外の遺構については、隣接する218地点で溝より南側に井戸や墓などの生活あるいは祭祀に関連する遺構があり、遺物についても溝より南側に多量の瓦類の出土があり北側にはみられないことなどから、これらの溝を北の境界とする屋敷地あるいは境内があり瓦葺きの建物が存在したことが想定される。また文献からも藤原北家勧修寺流の人びとの邸宅や、吉田社を中心とする構がこの地付近に存在したことがわかっている〔浜崎83〕。しかしながらこれまでの調査をみる限り、本部構内で発見された遺構は人びとの居住地に直接つながるものではなく、墓や廃棄場所や砂取り穴などの居住地周辺の様相を呈しており、居住の中心からはやや外れているものとかんがえられる。

溝の形態に目をうつすと、今回検出した溝は多様である。屈曲する断面U字形の溝SD3は、水流の跡は認められなかったもののその形態から水路として機能したものであったと理解したい。また、約10mの間隔をおいて南北に連なる2対の溝SD2・SD9とSD13・SD14は、何らかの出入口部分であった可能性もある。断面V字状で長大な溝SD6や、断面逆台形状の大規模な溝SD4・SD5・SD7は、単なる区画以上に防御的な機能をもっていたとかんがえられる。旧平安京の洛中・洛外において防御を目的とした堀が多数発見されており、洛外の堀は鎌倉時代後期から室町時代にかけて存続し、戦国時代にはほとんどが埋められてしまうが〔山本96〕、今回発見した溝はこれより早い時期の例に相当しよう。

溝から出土する遺物は12世紀後葉から13世紀前半に時期を限っており、掘削後比較的短期間の間に廃絶されたと推測できる。遺物の内容は瓦器などの煮炊用土器や白色系土師器などの祭祀に関連するとおもわれる遺物も多く、溝は廃絶後周辺でおこなわれた祭祀や生活廃棄物の捨て場となったとかんがえられる。14世紀以降の遺物は全体に少なく、中世後半には耕作地と化していったようだ。近世には一面の田畑となり、こうした景観は幕末に尾張藩邸が設置されるまでつづき、明治20年には京都大学の前身である第三高等中学校がこの地に創設されるのである。

(2) 古代・中世の遺物 (図版22-2, 図50)

古代と中世の遺物のうち、特色のあるものを取りあげここで検討しておく。

緑釉円塔 上層の中世遺構からではあるが、緑釉の円塔が出土した(図32-II55)。焼き物の小仏塔については泥塔や土製円塔と呼ばれ、素焼きを中心としたさまざまな形態のものが知られている〔石田編72〕。今回出土したものは鐙状の基台上に半球状の伏鉢ふくはつをの

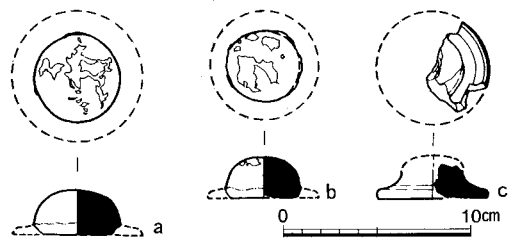
せる形態で、緑釉をほどこしたものである。同様のものは京都大学構内から過去に3例の出土があり〔泉81, 五十川ほか95〕, すべて医学部構内からのものである。未発表のものを含めてここに改めて図示した。

京都大学構内出土のこれら4例の円塔は、その特徴から3つに分類できる。II 55と a は扁平な形状の伏鉢が鏝からまっすぐ立ちあがる形態をもち、釉調は淡黄緑色を呈するが、底面の釉ははげ落ちている。伏鉢下部には細かい布目の圧痕と皺が観察でき、型による成形であることがわかる。大きさは伏鉢の径4.5cm, 高さ2.5cmをはかる。鏝は全周あるいは大半を欠失している。この2例は形態・釉調ともよく似通っており、同一の型による製品である可能性がある。b は上記2例と同じ製法で形態もよく似ているがやや小型のもの。釉調は濃緑色で、やはり鏝を欠失し底部の釉も磨滅している。大きさは伏鉢の径4cm, 高さ2.2cmをはかる。c は上記3例と形態も製法も異なる。伏鉢が鏝から緩やかな曲線を描いて立ち上がる形態をもち、全面に回転台による横撫での痕跡が残り、底部の糸切り痕は撫で消す。釉は鮮やかな淡緑色を呈し、底面にもおよぶ。大きさは全径6cm, 伏鉢径3.5cmで、頂部を欠失しているため高さは不明である。

同様な円塔は京都大学構内を含めて京都府岡崎の白川地区周辺に出土が集中するが、平安京内や鳥羽離宮跡のほか奈良県、愛知県や岩手県からも発見されている〔早野97〕。その形式には型作りのもの、回転台成形のもの、無釉のものなどさまざまである。これらの円塔は大治3(1128)年、法勝寺における法会のさい、白川法皇が供養した18万余基の円塔に比定されるものであるが〔西田25〕, 時期が特定できないものも多く、具体的な使用方法や流通あるいは形態や製法の全容を明らかにするには、まだ資料が不十分である。今後の調査に期待したい。

搬入土師器 今回の調査では中世の遺構から、回転台による成形で底部に糸切り痕を残し、灰白色を呈する土師器が13世紀前葉～中葉の遺物と共伴して多数出土した。胎土は粗く気泡を多く含んで硬質に焼成され、明らかに京都産の土師器と異なる特徴をもつ。こ

図50 京都大学構内出土の緑釉円塔
(a 医学部構内 AE15 区出土, b 同
AO18 区出土, c 同 AM17 区出土)



これらの土師器は2つの器形があり、口径13~14cm器高3.5cmの杯と口径8~9cm器高1.5cmの皿がこれにあたる。出土状況を見ると、完形かそれに近い形で一括してまとまった量を投棄してあり、複数の遺構にまたがる。同様の土器は隣接する218地点で出土したほか、本調査区南方約1.1kmの白川街区跡でも完形の回転台土師器が土坑から一括出土しており、調査者は12世紀後半の年代を与えている〔吉村96〕。これらの出土状況や、胎土が白色系の色調を呈することなどから、祭祀などで使用されたあと一括廃棄されたものとかんがえられる。しかし、現在のところ産地をはじめ、搬入された目的や具体的な用途は不明とせざるをえない。今後の資料の増加をまって再検討したい。

なお、先史時代の自然流路について竹村恵二氏（本学大学院理学研究科）、中世の搬入土師器について吉村正親氏（京都市埋蔵文化財研究所）にそれぞれ御教示を得た。末尾ながら、感謝申し上げます。

発掘調査と整理調査は古賀と吉田広が担当した。測量・実測などの作業は、西調査区では下坂澄子・柴垣理恵子・中井淳史・安見昌幸・飛知和東子・大岡由記子・鈴木雅美が、また東調査区では磯谷敦子・柴垣・長尾玲・伊藤休一・佐藤啓介が補助した。